國語讀本

改訂新版

巻一

375.9
Ue 4
資料室

41494
教科書文庫
4
810
41_1938
20000
64982

資料室

文部省檢定濟
昭和十三年二月廿六日●中學校國語漢文科用
昭和十三年二月廿六日●實業學校國語科用

國語讀本 卷一

改訂新版

文學博士 上田萬年
榮田猛猪
鹽野新次郎
共編

広島大学
教
64982
図書

3759
Ue 4

國語讀本　巻一

目次

一　聖徳を仰ぐ　石井國次　一
二　人生の曙　大島正徳　一一
三　若き生命（詩）　三木露風　一六
四　木のぼり　前田夕暮　一八
五　競漕　久米正雄　二三
六　遍路　荻原井泉水　三一
七　猫の作戦　夏目漱石　三七
八　ポチ　長谷川二葉亭　四五

九	菖蒲	島崎藤村	五三
一〇	心の修行	村井弦齋	六一
一一	鮎のかげ（詩）	室生犀星	六五
	ふるさと（歌）	石川啄木	六七
一二	水郷めぐり	高濱虚子	六八
一三	鳥居強右衛門	湯淺常山	八一
一四	黒鯛つり	佐藤惣之助	八五
一五	人間の大小	薄田泣菫	九〇
一六	親ごころ		九四
	一 酒匂なる二兒へ	大町桂月	九四

	二 米澤なる愛兒へ	五十嵐力	九七
	たのしみは（歌）	橘曙覽	一〇〇
一七	手紙の懷かしさ	前田晁	一〇〇
一八	無線電信	水上瀧太郎	一〇四
一九	乃木大將（詩）	森鷗外	一〇九
二〇	雲の峰	國富信一	一一五
二一	グラフ、ツェッペリン號に乘つて	圓地與四松	一二三
二二	丘のほとり（詩）	福田正夫	一三五
二三	初秋の窓から	相馬御風	一三八
二四	童心	北原白秋	一四四

二五　障子　鶴見祐輔　一五三
二六　四季小品　德富蘆花　一五七
二七　安井息軒　森鷗外　一六四
二八　立身に妙法なし　永田秀次郎　一七三
二九　修養三題　柳澤淇園　一七八
三〇　國歌と國旗　芳賀矢一　一八二

目次終

石井國次　茨城縣の人。教育家。學習院名譽教授。宮中顧問官。

國語讀本　巻一

一　聖德を仰ぐ

石井國次

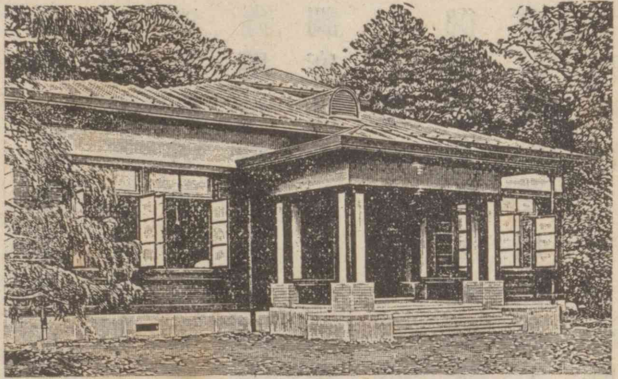
今上天皇陛下の允文允武におはしまして、萬民の上に君臨せさせ給ふ聖德をおのづからにお具へ遊ばすことは、申すも畏き次第でありますが、御幼少の砌、學習院御在學中の御事どもを拜し奉るにつけても、誠に感激に堪へぬことが多いのであります。

まづ第一に驚嘆し奉るは、御記憶の拔群にあらせられることであります。私は今まで多くの學生に接して參りま

したが、陛下のやうに御記憶の強いお方は見受けたことがありません。蟲の名でも貝の名でも、聯絡も系統も無い事まで、一度御覺えになつた以上は、決して御忘れになるといふことがありません。

御研究所内の天皇陛下

かく御記憶の拔群な上に、御研究心が非常にお強く、何でもいゝ加減にして置く事が御嫌ひで、詳細に御質問になり、又御自分で徹底的に御研究になるのであります。例へば歴史で聖德太子の事を申し上げると、御歸りになつて參考書を御調べになり、聖德太子の憲法とはどんなものか、三寶とはどういふ事かと御研究になる。理科で蝶の御話を申し上げると、『蝶類圖説』を御調べになつたり、盛に御採集になつたりして、日本産の蝶は勿論、外國産のものまでも御觀察になる。或は電氣の御話を申し上げれば、種々の器械を御取寄せになつて實驗遊ばされ、無線電信・電話の事まですつかり御理解になるといふ風であります。旅行・登山の御趣味も御豊富にあらせられ、單なる御運動としての


生物學御研究所

三寶　佛法僧。聖德太子の憲法の第二條に「篤く三寶を敬へ」とある。

蝶類圖説　岡崎常太郎著。蝶の各種類を圖によつて説明したもの。

明治神宮 明治天皇・昭憲皇太后を奉祀する神宮。東京市澁谷區に鎭座。

外に、地圖や案内記をよく御調べになり、其處の產物や、動物・鑛物から氣象の事まで熱心に御研究になる。萬事がかういふ風であらせられるから、御知識の確實で且深みがあらせられる事は、實に驚嘆し奉る外はありません。

明治神宮に參拜して明治天皇の日常御使用になつた御調度品を拜觀した者は、誰でも其の御質素なのに感泣しないものはないと思ひますが、陛下も亦その御遺傳のためか、御感化のためか、華美が御嫌ひであらせられます。それですから、御學用品等も全く一般學生と同樣な品を御使用になり、鉛筆などは、當時一錢五厘の鷲印のを好んで御使用になりました。而もそれがごく短くなるまで御棄てになり

ません。消ゴムも當時四五錢位のものを、豆粒位になるまで御使用になり、雜記帳でも、半紙や畫用紙でも、決して無駄には遊ばしませんでした。

それで、大正三年三月、陛下が初等科を御卒業あらせらるや、御高德を一般兒童に拜せしめたならば、國民敎育に裨益する所があるだらうと考へて、陛下の御使用になつた背囊・敎科書・雜誌・筆入から、帳面・鉛筆・ゴム、並びに御製作になつた手工品・圖畫・標本等を拜借して一室に陳列し、御敎室・御控室等すべてを公開して、一週間に亙り、市內及び近縣の小學兒童に拜觀せしめたことがあります。其の時、毎日何千といふ兒童が校長・敎員につれられて參り、私共は手別けをし

て種々說明を致したのであります。たしか京橋か日本橋あたりの學校と思ひますが、女の子で、かなり綺麗な服裝をして、幅の廣いリボンなどをつけて來た一組がありました。私が其の女生徒たちに說明をしてから、「皆さんは、殿下でさへかやうに御質素であらせられる事を拜見したら、もう立派な着物だの、幅の廣いリボンだのを家庭でおねだりが出來ないでせうね。」と申したら、たいそう感激して泣いた生徒が隨分ありました。

陛下は又非常に規律正しいことが御好きであらせられます。朝の御起床から御拜・御食事・御通學・御復習・御運動・御入湯・御寢まで、實に規則正しい一日の御日課を御守りにな

つて、御變更になる事は容易にありませんでした。從つて色々の事を遊ばすにも、すべて規則正しい御計畫をお立てになつて、組織的に遊ばすといふ風であらせられます。

陛下はまた實に公平無私であらせられます。例へば戰爭ごつこをやつたあとで、私が其の審判や講評など致します時、御自分の方に不利な事がお有りになつても、少しもお包みなく御申出になる。角力で、陛下が相手をお投げ遊ばされて、軍配が御自分に揚つても、行司の氣附かなかつた少しの踏切などが御自分にお有りになると、「私に踏切があつたから負です。」と御主張になる。審判者や行司が少しでも不公平な判定をすると、非常に御嫌ひになる。仲間の者が、

「其の方が御都合がお宜しいではございませんか。」などと申し上げると、「そんな不正直な事はいけない。」と仰せになる。從つて歴史上の事柄を御批判遊ばされる時など、實に理路井然、公明正大で、よく大局から斷案をお下しになる。實に陛下の御心は少しの曇もない明鏡であらせられます。それゆゑ陛下の御心鏡の前に立つては、正邪善惡の姿がはつきりと顯れて、隱すことは出來ないのであります。

陛下は非常に御仁心が深い。どちらかと申せば御口數の少ない方で、御世辭などは仰せられないが、誠に思ひやり深くあらせられます。從つて御幼少の時分から、普通の子供に有りがちな、友達にからかふとか、意地惡い事をすると

かいふやうなことは決しておありになりませんでした。そして御學友に對しても、御側の者に對しても、好き嫌ひといふことが全くなく、一視同仁で、公平に御愛しになります。侍從や侍從武官などにも、新舊の差別なしに優しく御接しになるさうです。而も舊い人をいつまでも御忘れにならずに、元の侍女や御學友などが御伺ひ申すと、大變に御喜になりますし、時々の御召もあります。私どもにもやはり其の通りで、御誕辰其の他の御祝にはきつと御召があり、御機嫌伺に出れば、特別に拜謁を許され、御暇の時は何時までも御引止めになつて御言葉を賜ふのであります。先年御外遊の御時には、私はロンドンやパリで御迎へ申し上げまし

たが、屢、御召を蒙つて御陪食を賜はり、内外諸名士の前でも、先生、先生と仰せられるので、覺えず無上の光榮に感泣した次第であります。人心がだん〳〵荒んで、師恩を忘れるどころか、全くこれを念頭におかないやうな青年學生の多い今日、陛下のかゝる御態度は、實に貴い御模範ではありますまいか。

陛下の御盛德を稱へ奉ることは到底私どもの能くするところではありませんが、要するに陛下は御天性實に間然する所の無い御方で、現つ神としての神々しい御性格を先天的に御具へあそばしていらせられると申し奉る外はありません。（教育研究）

大島正德　神奈川縣の人。倫理學者。東京帝國大學講師。

二　人生の曙

大島正德

少年はいつまでも少年でゐない。やがて青年となり大人となる。大人となれば、世の中に對して人たる責任を身に負はねばならぬ。人がこの責任を感ずるやうになるのは、小學校を卒へた頃からで、例へば、曙の光がほの〴〵と山の端から射すが如く、自分の心にだん〳〵と世の中が見え初めて來る。

小學校に居る時分は、爲すべき事といつては、日々の課業を勵むことであり、又その欲する所は、山に行き、川に遊ぶといふやうな事であつたが、一たび小學校を卒へると、先づど

うして此の世に立つて行かうかと考へる。何になり、何をしたらよいか、自分の性質をも顧みて果して如何なる仕事に適してゐるかなど考へる。世の中の事に對しても、善い悪いの分別もついて來る。こゝに自己を修養するの必要を感じ、志を立てねばならぬことを覺り、又自分の任務を知り、さてはこの社會・國家を改善して行かうなどといふ大きな望をも起す。かうして少年の心は人生の曙に目覺めるのである。

曙の空は爽快であり多望であるやうに、人生の春に立ち、曙に臨んだ少年の心は、何のわだかまりもない極めて望の多いものである。同時に少年の多くは空想家である。前

途にしたいと思ふことが數限りなく心に浮び起つて、恰も夏の雲の湧き出るやうである。

けれども、人にはそれ／″＼の性質があり、事情があり、境遇があつて、誰しもが思ふまゝに何事でもする譯にはいかない。そこで自分の性質・境遇・事情を考へ、父兄・長上とも相談して、世の中に立つて行く方針を定めねばならぬ。商業なり工業なり農業なり、その他何にせよ、一定の職業を執つて世に立つことを心に決めねばならぬ。そして愈、或一定の職業に志を立てたならば、前人の歩いた道を辿るばかりでなく、自分の正しい考によつてその執るところの仕事を改良し、自らも進み、世をも進めて行く覺悟がなくては

ならぬ。

さて、人生の曙に目覺めた少年は、先づ心を靜めて、人生の最も尊いことは何であるかを考へて見るがよい。 抑〻人生の最も尊いことは、一個の人間として立派なものになることである。 人は富あり名譽あり學問ある人に對すれば、或は羨み或は妬むけれども、心から感ずることは殆どない。然るに人間として尊ぶべき立派な行のある人に對すれば、誰しも心の底から感ずる。 羨みも妬みも忘れて、只その人を仰いで尊く懷かしく感ずるものである。 かういふ感心すべき人は、農夫にもあり、商人にもあり、その他如何なる職業、如何なる境遇の人々にもあり得る。 故に我々はたゞ富

あり名あり知識あることのみに務めて、世の中の人をして單に羨ましめ妬ましめることを願はうよりも、寧ろ立派な行をして、心から感ぜしむべきである。 人を感ぜしむる力は、他人の心に力を與へ生命を與へるものである。 我々は、心を誠にし、自ら進み、人を愛し、人を敬ひ、人の善を喜ぶやうな立派な人間となることが肝腎である。 かゝる人が、眞に他人を感ぜしめる尊い人である。

要するに、自分の境遇・位置・性質等を考へて、自分の方針を一定すると同時に、その境遇・職業の如何に拘らず、人間として立派な一生を送らうと覺悟するのが、人生の曙に立つものの、第一に心がけねばならぬことである。

（公民道德）

三木露風　名は操。兵庫縣の人。詩人。

三　若き生命

三木露風

萠えよ〳〵春の草
生ひよ〳〵野邊の草
あたらし夢をはぐくみて
春の生命をのばせかし
長き眠の冬の土
いつしか覺めてよみがへり
芽をふく千草八千草の
生の力の不思議さよ

小川の水は溫みたり
日は晴れ空は薄霞み
つぐみやひわや鶯や
さやかにあそぶ彌生月
萠えよ〳〵春の草
生ひよ〳〵野邊の草
綠の褥をしきつらね
若き生命を飾れかし

（靑き樹かげ）

前田夕暮　名は洋三。神奈川縣の人。林業家。歌人。

四 木のぼり

前田夕暮

青桐の幹は青くてすべ〱してゐる。まして二十年生ぐらゐの若木の快い幹の肌ざはりは、冷たくて、たつぷりと水をふくんでゐる。樹皮をすかして青い纖細な神經が感じられるほどである。

私の子供がその青桐の木に登らうとしてゐる。子供は全身的に幹に抱きついて、背をまろくして三四尺ほどやつとの事で登る。若木の青桐は、空にひろげた若葉を、梢の方でびり〱と輕くふるはしてゐる。

子供は顏を眞赤に染めて、瞳を黒く光らせながら、また五六尺のところまで登つて、暫くぢつとこらへてゐたが、するするとすぐに滑り落ちてしまふ。

子供は滑り落ちてしまふと、暫くの間は胸を小鳥のやうにふくらませながら、樹を高々と仰いでゐる。

青桐と子供

子供は意を決するもののやうに、上着を地面に投げつけて、今度は勢ひ猛に登りはじめる。兩手でしつかり樹を抱きしめて、靴の踵を樹の肌につけて、遮二無二登つて行く。が、子供の體は二尺登つては一尺ずりさが

り、三尺登つては二尺ずりさがる。そして五六尺の高さまで行つて力が盡きたのか、またする〳〵と地上に滑り落ちるのである。

もうあきらめてやめるだらうと思つて、私は少し離れたところから見てゐると、子供は靴をぬいで、一二間さきの方へぽんと投出して、跣足になつて、足の裏に砂をまぶしつける。そして樹に飛びつくやうに抱きついて、からみつくやうな體のうねりを見せてから、うん〳〵とうめきながら、手も顔も眞赤にして登りはじめる。私は見てゐて少し苦しくなつて來たので、餘程とめようと思つたが、それでもと、私までが全身に力をこめて、思はず子供と吐く息吸ふ息を合

せた。

子供は忽ち五六尺のところまで登つて、ちよつと考へてゐるやうであつたが、何の造作もなくまたする〳〵と滑り落ちて、さすがに疲れたと見えて、倒れるやうに地べたに寢そべつてしまつた。そして寢ながら青桐の梢を仰いでゐるのだ。

子供は寢てゐる間にすぐに疲勞を回復したと見えて、忽ち起きあがつて、今度は襯衣もズボンも脱ぎすてて、猿股一つになつて、側においてある支那製の水甕へ片手を入れて、掌で水をすくつて口うつしに飲んだと思ふと、日光の方に向つて、ふうと霧をふいて、腹を大きく膨らませたり低くし

たりしてゐたが、また足の裏に砂をまぶしつけて、ちよつと上を仰いで見て、更に勢ひ猛に樹にとびつく。青桐は少しゆら／＼と搖れる。

今度はみる／＼間に六七尺ほど登る。第一の下枝が頭のすぐ二三尺上のところにある。子供は滿身汗にまみれ、全身朱に染まつて、兩手を長くのばせるだけのばして、幹を抱いたかと思ふと、縮めてゐた足が同時にのびる。と、もう兩手を上にぐつとのばしてゐる。そして下枝に片手をかけたかと思ふと、ひらりと身を跳らせて、その枝の上に立ちあがつた。そして私の方を見おろして、「おーい。」と大きな聲をして呼ばつた。「おーい。」と私も思はず手をあげた。

青桐の葉といふ葉は、風にゆられながら日の光を受けて、きら／＼と喜ばしげに光る。（綠草心理）

五 競漕

久米正雄

競漕の日は來た。空は朝から美しく晴れあがつた。學校の學務室から小使が朝早くやつて來て、合宿所の前に樺色の大きな旗を立てた。それがいかにも晴れがましく見えた。

午後になると晴れたまゝに風が吹いて來て、應援船の旗をはた／＼と鳴らした。コースには可なり荒い波が立つた。愈、競漕が始らうといふ頃になつたら、珍しい夕凪が來

久米正雄　長野縣の人。小說家。
學校　東京帝國大學。
コース　航路。水路。

ユニフォーム　制服。

臺船　棧橋につないだ方形の船。棧橋から端艇に乗移る便に供する。

た。

　選手は皆樺色のユニフォームを着た。土手では觀衆が一種の尊敬と好奇の念を持つて、此の樺色の衣服を着た選手達に道をあけた。

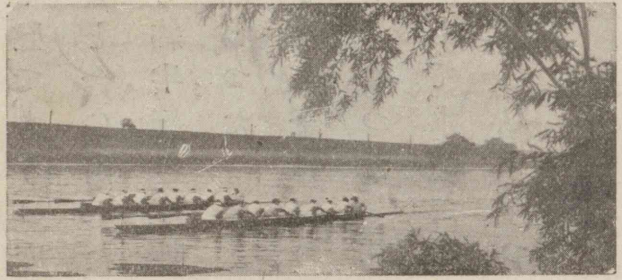
　味方の短艇がまづ拍手に送られて臺船を離れた。二十本ほど漕いで、審判艇の差出す綱に繫留した。續いて紫の敵艇も繫がれた。

　艇庫と土手と應援船から「樺あ。」「紫い。」などといふ聲が錯綜して起つた。審判艇は二つの艇を曳いて發足點へ向つた。

　艇は發足點の赤い浮標に着いた。水路を見渡すと、風は全く凪いでゐるのではなかつた。それは絶えず東北から

シート　ボート内で漕手の腰掛ける席。轉じてその席と席との距離をいひレースの場合の距離の標準とする。

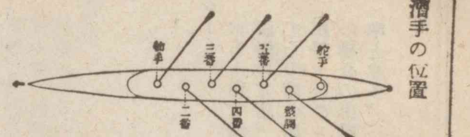
吹いて來て、艇首を左へ曲げた。私は氣が氣でなかつた。



其の中に「用意」の命が下つた。艇首は又一瞬間强風に曲げられた。「えゝ、まゝよ。もうなるやうになれ。」と眼を瞑つた。號砲が鳴り渡つた。一用意と號砲の間がほんの一瞬間であつたのに、ひどく長いやうに思はれた。二つの艇の櫂は同時に水に入つた。

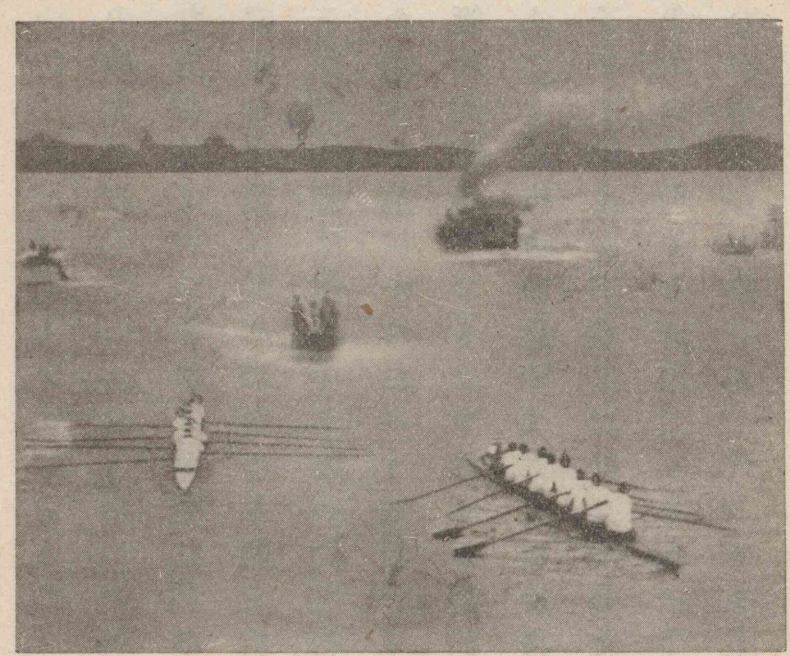
　味方の艇はどうも滑り出しがよくなかつた。「こいつはいけない、皆慌てたな。」と思つた。敵艇を見ると、確かに一二シートは此方より出

漕手の位置



スプラッシュ 水をはねとばすこと。

てゐるらしい。「ゆつくり。」と整調が叫んだ。私は更に大きな聲で、もう一度其の言葉を全艇に傳へた。皆の調子がやつと合ひ出した。此の時向うの紫の舵手が「敵艇を拔くこと約半艇身。」と叫んだ。私は忽ち其の後を受けて「嘘だぞ。」と怒鳴つた。今まで默つてゐた私は、一度其の言葉をいつて了ふと、急に口の緊りが解けたやうな氣がして、恐ろしく雄辯になつた。其の中に紫の三番が一つ大きなスプラッシュをして、水煙が鮮かにぱつと騰つた。機を得たと言はぬばかりに、私は「やつたぞ、あんな大きなスプラッシュを。」と叫んだ。それを見た者、見ぬ者も、みな其の言葉に元氣づいた。敵の艇は沈默してしまつて、間もなく二つの艇は並んだ。



そして水門前で、味方は約半艇身先んじてゐた。紫の舵手はそれでも「向うは、もうへたばつたぞ。」などといつた。私も「なあに、此方が出てゐるぞ。」と應酬した。

水門まで來かゝると、私は「さあ、水門だ。」と敵に先んじて叫んだ。

渡場　隅田川の竹屋の渡をいふ。
ピッチ　調子。

いかなる舵手でもいふにきまつてゐる場所の指示を、敵艇の機先を制していふのも、一つの戰術であつた。早くいつた方が、晩くいつた艇より先に其の場所に屆いた譯だからである。後れ馳せに敵は水門で特別な力漕を十本した。それで亦艇は並んでしまつた。後から追附かれると、何だかずつと追拔かれたやうな氣がするものである。味方の艇は何だかいつもより船脚が遲いやうであつた。でも暫くすると、味方の艇が又じり／＼拔きだした。「此の調子で。」と叫んだ。敵は沈默してゐた。そして渡場での力漕十本は効力がなかつた。整調は半眼で其の力漕を見やりながら、やつと安心してピッチを上げ出した。

ラストヘビー　最後の力漕。

洗場では半艇身以上先んじてゐた。併し此處での半艇身ばかりの差では、敵のラストヘビーが利けば何の役にも立たない。私は「あと一分だ。もう死んでもいゝぞ。」と激勵した。此の「あと一分。」といふ練習中に用ひ馴れた言葉が、何よりも選手を元氣づけた。一分間なら、いくらへたばつても漕げる筈なのである。

皆は疲れて來た。すると不思議に艇がよく出だした。味方の艇は、疲れて來ると、各個人の癖がとれて、全體としての調子が揃ふのである。協力は此の時始めて平均した。そして整調の櫂につれて、各は器械的に身體を前後に動かした。

敵のラストも實によく出た。併しこれを見て氣遣つてゐる間に、味方の方のヘビーも非常によく利いた。多年の熟練で整調のピッチがぐん〳〵上つた。「もう十本。」決勝點に入る迄は隨分長く感ぜられた。私はひよつとして、もう決勝點へ入つてゐるのに、審判の號砲が發火しないのぢやないかと思つた。其の瞬間に號砲は響いた。皆は漕ぎやめて、艇内に身を伏せた。私は始めて此の時嵐のやうな喝采が水上に鳴り響いてゐるのを聞いた。これは決勝點に近づく時から盛に鳴つて居つたのであるが、私の耳には入らなかつたのである。

「どつちが勝つたんだ。」と、二番が苦しい息の中から情ない聲を出した。

「安心し給へ。僕等だ。」と私は答へた。併し私自身も勝利を確信してゐるのではなかつた。そして審判所に揭げられた樺色の旗を見るまでは安心がならなかつた。

喝采はまだ續いてゐた。今までに類のない程の接戰であつたのが、敵味方のいづれにも屬してゐない觀衆をさへ、熱叫せしめたのである。

（學生時代）

荻原井泉水 名は藤吉。東京市の人。俳人。

六 遍路

荻原井泉水

りん〳〵といふ冴えた音が、遙か山裾からこの山莊にまで聞える。それはお遍路さんが振る鈴の音なのだ。

弘法大師 僧空海。本姓佐伯氏。讚岐の人。眞言宗の開祖。承和二年（一四九五）寂、年六十二。

小豆島 瀨戸内海に在る小島。香川縣に屬する。

「お遍路さん」とは何といふ親しみ深い言葉だらう。四國八十八箇所に遺された弘法大師の靈場を、遍歷して歩くのがお遍路さんである。併し、如何に信仰のためとは云へ、四國を一周することは、日數からも、勞力からも、殊にお遍路さんに多い女の身として、大抵の事ではないので、四國の代りに、この小豆島にある八十八箇所の靈場を一巡すれば、同じ功德を積み得る事とされてゐる。「島四國」といふ言葉も出來てゐる。島四國の遍路にしても、女の脚では六七日かゝると云

お遍路さん

岡山 岡山縣岡山市。

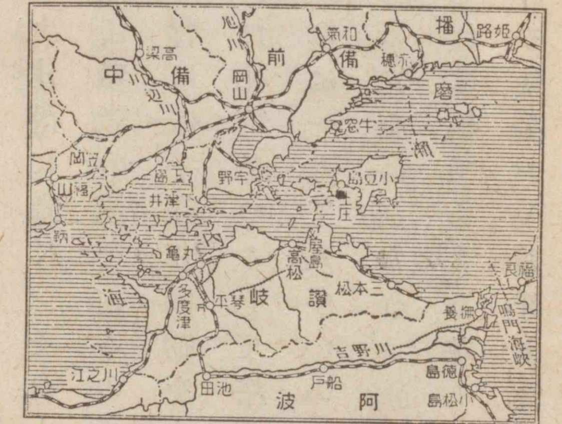
高松 香川縣高松市。

土庄港 小豆島の西岸にある港。岡山から十八浬、高松から十二浬。

ふことである。

岡山から、若しくは高松から來るお遍路さんは、多くは船で土庄港に着く。それから發足して第何番といふ札所の順に參詣の道を辿るのである。菅笠をかぶり、裾をからげて、背には手廻りの物を太い紐で負ひ、胸には自分の名を入れた札箱をつるして、塔婆形に刻んだ金剛杖を持つて、淋しいのは一人二人、多いのは何十人と團體をなして、銀の樣な海の光を浴びながら、海に近い麥畑の中の道を辿つて行く。それは繪である。美しいことである。この山莊にまで聞えるりん／＼と冴えた鈴の音は、彼等の先達が振つてゐるものと見える。

お遍路さんは時を限らないが、風も日も長閑に、路を歩くのに好い氣持であり、又農業も比較的ひまな四月頃一番多く見受けると云ふことだ。この頃島に着く船は、日に何百人といふお遍路さんを渡して來る。一體遍路といふものが、何時の時代から始まつたものかは知らないが、大師の教門を弘くする上から言つても、各自の信念を厚くする上から言つても、善いことだと思ふ。それればかりではない。お遍路さんは



小豆島附近

到る處で愛せられる、又惠まれる。

お遍路さん同士も亦お互に遍路であると云ふことのために信頼する、又扶助する。是が實に善い事だと思ふ。未知の人達が道連になつて親しんで、行く路を教へ合ひ、足らぬ物を足し合つて行く。お遍路さんが路傍の家に荷などを置けば、どの家でも喜んでくれる。決して紛失しないといふことだ。是は遍路としての誰もが、一つの眞實の道に繫がつてゐるといふ意識から來るのだ。此の道に參ずるには、知識も修養も資格も、そんなものは何もいらない。婆さんでも娘でも男でも子供でも、たゞ一つの道を信ずる事によつて、此の尊い心持に一致することが出來るのだ。「南無大師遍照金剛」と讃仰する

聲が出て來るのだ。是は實に美しい事だ。爭鬪と欺瞞とに滿ちた社會の中にあつて、信頼と扶助とに心を合せて行き得る事ほど、美しい事が他にあるであらうか。此の島の春を賑はすお遍路さんは、繪としてのみ美しいのではない。彼等が愛し合ひ信じ合ふ事に生きるが故に美しいのである。

而して此の事は獨り彼等お遍路さんの上の事のみではない。私達は皆人生の遍路である。銘々に自ら負はねばならぬ物を負うて、自分の名前を書いた札を播き散らしながら、自分々々の路を遍歴してゐるのである。しかも私達の周圍には、此のお遍路さんに見るやうな信頼と扶助とが

行はれてゐるだらうか。私は思ふ、私達は此のお遍路さんに學ばねばならない、遍路といふ行事を遺した弘法大師の暗示を感じなければならない、而して人間の悉くがお遍路さんの心を心とするまでに到らなくとも、私達はまづお遍路さんの信と愛とを以て、人生を歩きたいものであると。

（山水巡禮）

七 猫の作戰

夏目漱石

夏目漱石　東京の人。名は金之助。文學者。大正五年歿、年五十。

吾輩はとう〳〵鼠を捕る事に極めた。

元氣旺盛な吾輩の事であるから、鼠の一匹や二匹は、捕らうといふ意志さへあれば、寢て居てもわけなく捕れる。今

まで捕らぬのは、捕りたくないからの事だ。

春の日はきのふの如く暮れて、折々の風に誘はれる花吹雪が、臺所の腰障子の破れから飛込んで、手桶の中に浮ぶ影が薄暗い勝手用のランプの光に白く見える。今夜こそ大手柄をして、うち中驚かしてやらうと決心した吾輩は、豫め戰場を見廻つて、地形を飲込んでおく必要がある。戰鬪線は勿論餘り廣からう筈がない。疊數にしたら、四疊敷もあらうか。其の一疊を仕切つて、半分は流し、半分は酒屋や八百屋の御用を聞く土間である。竈

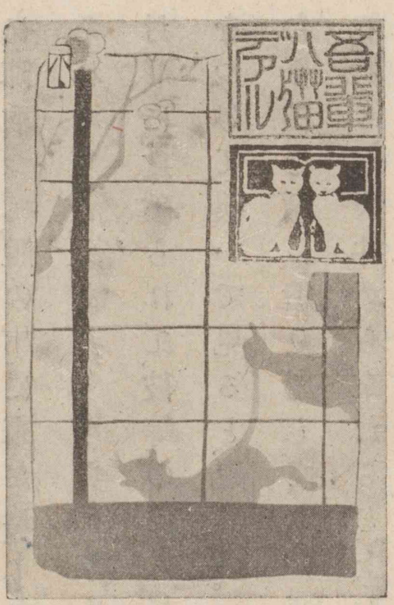
夏目漱石

は貧乏勝手に似合はぬ立派なもので、赤の銅壺がぴか〳〵してゐる。其の後の羽目板との間二尺が、吾輩の鮑貝の所在地である。茶の間に近い六尺は、膳・椀・皿・小鉢を入れる戸棚となつて、狭い臺所をいとど狭く仕切つて、横に差出たむき出しの棚と、すれ〳〵の高さになつて居る。其の棚の下に擂鉢が仰向に置かれて、擂鉢の中には、小桶の尻が吾輩の方を向いて居る。大根卸・擂粉木が並べて懸けてある傍に、火消壺が置いてある。眞黑になつた椽の交叉した眞中から、一本の自在を下して、先には平たい大きな籠をかけてある。其の籠が時々風に搖れて、大様に動いて居る。

是から作戰計畫だ。どこで鼠と戰爭するかといへば、無

論鼠の出る所でなければならぬ。如何に此方に便宜な地形だからといつて、一人で待構へて居ては、てんで戰爭にならぬ。こゝに於てか、鼠の出口を研究する必要が生ずる。「どの方面から來るかな。」と、臺所の眞中に立つて四方を見廻す。何だか東郷大將になつたやうな心地がする。下女はさつき湯に行つて、歸つて來ぬ。子供は疾くに寢た。主人は相變らず書齋に引籠つてゐる。細君は何をして居るか知らない。時々門前を人力が通る。通り過ぎた後は一段と寂しい。我が決心といひ、我が意氣といひ、臺所の光景といひ、四邊の寂寞といひ、全體の感じが悉く悲壯である。どうしても猫中の東郷大將としか思はれない。かういふ境涯に入

ると、物凄い中に一種の愉快を覺えるのは、誰しも同じ事であるが、吾輩は此の愉快の底に、一大心配が横たはつて居るのを發見した。鼠と戰爭をするのは覺悟の前だから、何匹來てもこはくはないが、出て來る方面が明瞭でないのは不都合である。周密に觀察して見ると、鼠族の侵入するには三つの路がある。彼等が若しどぶ鼠であるならば、土管に沿うて、流しから竈の裏手へ廻るに相違ない。其の時は火消壺の蔭に歸路を絶つて



「吾輩は猫である」の表紙と挿畫

やる。 或は溝へ湯を拔く漆喰の穴から風呂場へ廻つて、勝手へ不意に飛出すかも知れない。 さうしたら、釜の蓋の上に陣取つて、眼の下に來た時、上から飛下りて一攫みにする。それからと、又あたりを見廻すと、戸棚の戸の右の下隅が半月形に食破られて、彼等の出入に便なるかの疑がある。 鼻をつけて嗅いで見ると、鼠臭い。 若しこゝから突貫して出たら、柱を楯に遣り過しておいて、横間から、あつと爪をかける。 もし天井から來たらと、上を仰ぐと、眞黒な煤がランプの光で輝いて、地獄を裏返しに吊した如く、ちよつと吾輩の手際では、上る事も下る事も出來ぬ。 まさかあんな高い處から落ちて來る事もなからうからと、此の方面だけは警戒

を解く事にする。 それにしても三方から攻擊される懸念がある。 一口なら片眼でも退治して見せる。二口ならどうにかかうにか遣つてのける自信がある。併し三口となると、吾輩も手のつけやうがない。 どうしたらよからう、どうしたらよからうと考へて、好い智慧が出ない時は、そんな事は起る氣遣はないと極めるのが、一番安心を得る近道である。又法のつかないものは、起らないと考へたくなるものである。 吾輩の場合でも、三面攻擊は必ず起らぬと斷言すべき相當の論據はないのであるが、起らぬとする方が、安心を得るに便利である。 安心は萬物に必要である。吾輩も安心を欲する。 よつて三面攻擊は起らぬと極める。

それでもまだ心配が取れぬから、どういふものかと段々考へて見ると、漸く分つた。三個の計略のうち、いづれを選んだが最も得策であるかの問題に對して、自ら明瞭なる答を得るに苦しむからの煩悶である。戸棚から出る時には、吾輩之に應ずる策がある。風呂場から現れる時は、之に對する計がある。又流しから這上る時は、これを迎へる成算もあるが、その中どれか一つに極めねばならぬ事になると、大いに當惑する。東郷大將はバルチック艦隊が、對馬海峽を通るか、津輕海峽へ出るか、或は遠く宗谷海峽を廻るかに就いて、大いに心配されたさうだが、今吾輩自身の境遇から想像して見て、御困却の段、實にお察し申す。

吾輩はかく夢中になつて、智謀を運らして居る。夜はまだ淺い、鼠はなか〳〵出さうにない。吾輩は大戰の前に一休養を要する。（我輩は猫である）

八 ポチ

長谷川二葉亭

長谷川二葉亭 名古屋の人。本名は辰之助。號は二葉亭四迷。文學者。明治四十二年歿、年四十六。

ポチは朝起きだ。僕の起きる時分には、もう疾くに朝飯も濟んで、ひとつきり遊んだところだ。が、僕の聲を聞きつけると、何處にゐても一目散に飛んで來る。

僕が急いで庭へおりるところを、ポチは透かさず泥足で飛びつく。細い人參ほどの赤ちやけた尻尾を懸命にふりたてて、嬉しさうに面を見上げる。見下す。目と目とぴた

りと合ふ。　たまらなくなつて、僕が横抱きに引ん抱く。　ポチは抱かれながら、身をもがいて、大暴れに暴れ、僕の手を舐め、胸を舐め、顎を舐め、頬を舐め、舐めても〱舐め足らないで、惡くすると、口まで舐める。　父が顏をしかめて、汚い〱と言ふ。成程、考へて見れば、汚いやうではあるけれども、……しかし僕は嬉しい、止められない。

長谷川二葉亭

これが濟むと、ポチもやつと氣が濟んだといふ形で、また庭先をうろ〱しだして、縁の下なぞを覗いて見る。　と、そこに草鞋蟲の一杯たかつた古草履の片足か何ぞがある。

好い物を見つけたと言ひさうな面をして、それをくはへ出して來て、首を一つふると、草履は横飛びにぽんと飛ぶ。　透かさず追つかけて行つて、又くはへて、ぽんと拋る。　そんなたわいもない事をして、活潑に元氣よく遊ぶ。

その隙に僕は顏を洗ふ、飯を食ふ。　それが濟むと、今度は學校へ行く段取になるのだが、此の時が一日中で一番僕の苦痛な時だ。　ポチが後を追ふ。　うつかり出ようものなら、何處迄も〱ついて來て、逐つたつてどうしたつて歸らない。　こつそり出ようとしても、出掛ける時刻をちやんと知つてゐて、其の時分になると、何時の間にか玄關先へ廻つて待つてゐる。　仕方がないから、しまひには取つつかまへて

否應なしに格子戸の内へ入れて置いては出るやうにしてゐたが、さうすると、前足で格子を引掻いて、悲しい〳〵血を吐きさうな啼聲を立てて後を慕ひ、姿が見えなくなつても啼き止まない。僕もそれは同じ思だ。泣出しさうな顔をして、ばた〳〵と駈出し、聲の聞えない處まで來て、漸くほつとして並の歩調になる。そしていつも心の中で、繰返し繰返しこんな事を思ふ。

「僕がゐないと淋しいもんだから、それであんなに後を追ふんだ、かはいさうだなあ。……僕あ學校なんぞへ行きたかないんだけれど、……行かないと、お父さんがポチを棄てて了ふつて言ふもんだから、それでしやうがないから行くん

だけれども……。」

じやん〳〵と放課の鐘が鳴る。今まで靜かだつた校舎内が俄かに騷がしくなつて、彼方此方の教室の戸が前後して、あわたゞしくばつ〳〵と開く。と、その狹い口から、眞黒な塊がどつと廊下へ吐き出され、崩れてばら〳〵の子供になり、我勝ちに玄關脇の昇降口を目がけて駈出しながら、口口に何だかわめく。只もう校舎をゆすつて、わあといふ聲の中に、無數の圓い顔が默つて大きな口をあいて躍つてゐるやうで、何をわめいてゐるのか分らない。で、それが一旦昇降口へ吸込まれて、此處で又ごた〳〵と入り亂れ重なり

合つて、腋の下から才槌頭がひよつと出たり、反齒へ肱がぶつかつたり、靴の踵が生憎と霜燒の足を踏んだりして、上を下へとこね返したあげくに、わつと門外へ押出して、東西へちり〴〵になる。

　仲好し二人肩へ手を掛合つて行く前に、辨當箱をぽんと抛り上げては、ちよいと受けて行くいたづらものがある。其の隣は往來の石ころを蹴飛ばし〳〵行く。誰だか「あとで遊びに行くよ。」とわめく。「蝗を取りに行かないか。」といふ聲もする。「君、君。」と呼ぶ後で、誰かが誰かを罵る。「あ、痛い。」「何だい。」「わあい。」といふ聲ががや〳〵と入れ違つて、友達が皆道草を喰つてゐる中を、僕一人は駈拔けるやうにして、脇見もせずにせつせと歸つて來る。

　家の横町の角まで來て、くすぐつたいやうな心持になつて、そつと其の方角を見る。果してポチが門前へ迎へに出てゐる。　僕を見つけるや否や一散に飛んで來て飛附く、なめる。　何だか「兄さん。」と言はれたやうな氣がする。若し本包と辨當箱と草履袋で兩手が塞がつてゐなかつたら、僕は此の時ポチをつかまへて、どうしたか分らないが、それがあるばかりに、どうする事も出來ない。據なく頭を撫でてやるだけで、不承して、また歩き出す。と、ポチも忽ち身をくねらせて、横飛にひよいと飛んで駈出すかと思ふと、立止つて僕の顏を見て、おどけた眼附をする。　追附くと、又逃げて、又

其の眼附をする。　かうしてふざけながら一緒に歸る。
玄關から大きな聲で「只今。」といひながら内へ駈込んで、いきなり本包を其處に抛り出し、あわてて辨當箱をあけて、今日のお菜の殘り――と稱して、實はたべたかつたのを我慢して半分殘して來たのをポチにやる。　それでも足らないで、おやつにお煎を三枚貰つたのを、せびつて五枚にして貰つて、二枚はたべて、三枚は又ポチにやる。
それから庭で一しきりポチと遊ぶと、母がきつと「おさらひをおし。」と言ふ。　おさらひはいやだけれども、これをしないと、すぐポチを棄てると言はれるのがつらいので、澁々内へ入つて、型の如く本を取出し、少しばかりおんによごによ

島崎藤村　長野縣の人。名は春樹。小說家。詩人。

花祭　四月八日釋迦降誕の日花をたむける祭事。

クリスマス　十二月二十五日の基督降誕祭。

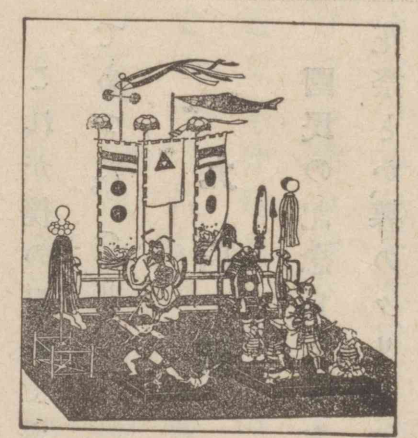
ごとやる。　それでおしまひだ。「餘り早いね。」と母が言ふのを、空耳つぶして、つと外へ出て、「ポチ來い、ポチ來い。」と呼びながら、近くの原へ一緒に遊びに行く。
これが僕の日課で、ポチでなければ夜も日も明けないのであつた。（平凡）

九　菖蒲

島崎藤村

國民の記念日でもなく、氏神の祭禮でもなく、卯月八日の花祭とか、暮のクリスマスとかのやうな、宗教の意味のある祭日ではないまでも、一年に二度の節句の祝が、たゞ〳〵幼いもののためにあるのはうれしい。　女の兒のためには三

月の桃の節句、男の兒のためには五月の菖蒲の節句があるのもうれしい。



菖蒲の節句の飾

五月人形の多くが武勇を誇とした舊い時代からの遺物であるといふやうな、さういふ理窟はぬきにしたい。そこに飾られる一切のものは皆玩具だ。あの三月の節句に取出されて、今にも合唱でも始めさうな雛や、古風な少年音樂隊のやうな五人ばやしのかはりに、五月の節句を祝ふためにあるものは鍾馗と、鬼と、金時と、桃太郎などの行列だ。

五月の空に高くひるがへる鯉幟は、あたかも子供の國をそこに打建てたかのやうに見える。狹苦しい町の中にあつても、あちこち屋根の上に鯉幟を望むのは樂しい。鱗を描いた魚の形、長い尾、大きな眼、空にかゝる金と赤と黑とのあの色彩、動きを悅ぶ子供の心を樂しませるやうなあの飛揚。大人の心をも子供にかへすものは、あのはた〱と風に鳴る鯉幟の音だ。五月の節句を祝ふものは、室内にも屋外にもあつて、軒にふく菖蒲までがお伽話の情調を誘ふのもなつかしい。

五月の節句を迎へる頃は、何と言つても季節の感じが深

木蓮

滿天星

大震災　大正十二年九月一日の關東地方の大震火災。

い。桃・櫻は過去り、椿や木蓮にも遲く、山吹と藤と滿天星などの花の香氣を放つ五月のはじめは、一年のうちの最も樂しい季節の一つだ。遠い山々へはまだ雪の來る日があつて、雨でも降れば袷では寒いこともあるやうなこの大震災後の都會へ、生氣をそゝぎ入れるのも、町々に見る新しい綠だ。私達の周圍は最早若葉の世界だ。この好い時候に、樂しい菖蒲の節句がやつて來る。

桃の花が少女にふさはしいやうに、菖蒲はおのづから男の兒にふさはしい。一ふし鋭いところのある葉の形もいい。爽かでみづ〴〵しい葉の色も好ましい。あれを軒に

奧の細道　松尾芭蕉が奧羽を旅した時かいた旅日記。
名取川　仙臺市の南方を流れてゐる川。

かけるといふことも、優しい風俗だと思ふ。一年に一度の菖蒲湯があつて、あの香氣が人を醉はせるばかりでなく、私達の身をも心をも溫めてくれるのもうれしい。青々とした菖蒲の浮いて居る中をかきわけて、湯槽に浸るのも樂しみだし、あの葉が私達の肌などへべたりと附いた時の心持も惡くない。

「奧の細道」に曰く、

「名取川を渡りて仙臺に入る。あやめふく日なり。旅宿をもとめて四五日逗留す。こゝに畫工加右衞門といふものあり、いさゝか心あるものと聞きて知る人になる。この

鹽釜　宮城縣(陸前)宮城郡鹽釜町。

あやめ草　菖蒲。

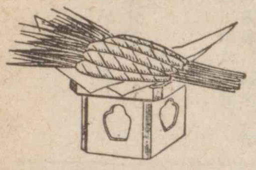
もの、年頃さだかならぬ名所を考へ置き侍ればとて、一日案内す。……なほ松島・鹽釜のところ〴〵畫にかきて贈る。且、紺の染緒つけたる草鞋二足餞す。されバこそ風流のしれもの、爰に至りてその實をあらはす。」

五月の節句といふと、この道の記の一節が私の胸へ浮んで來る。

あやめ草足に結ばん草鞋の緒

といふ私の好きな句は、その時に殘した芭蕉の旅情だ。あの道の記の文句の中に、紺の染緒をつけた草鞋二足を餞別に贈られたとあるのは、折柄のあ

奧の細道の旅（芭蕉と曾良）



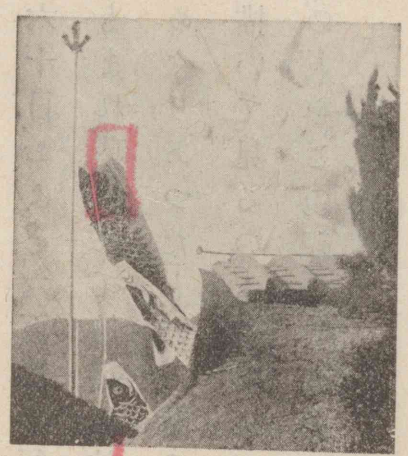
ちまき

やめの花の色から來た仙臺の畫家の思ひ付であつたらう。その道に精しい人の考證によると、「奧の細道」の旅は前後百六十日、およそ六百里の行程とある。そんな長途の雨風にもまれ、草臥れて旅宿に辿り着いた頃に、あやめふく季節にめぐりあつたといふ昔の人の旅の心の深さを、私達の胸に描いて見るのも懷かしい。子供の友達であつたやうな昔の人を、この祝の日に思ひ出して見るのもなつかしい。

粽のかをりは幼い日のかをりだ。粽ばかりは鄙びたところに造られるものほど好い。あの細長い粽の葉の巻きつけてあるのを解いて、青い色に蒸されたかをりを嗅いだ

私の家　東京市麻布區飯倉片町。作者の家は俗に狸穴（まみあな）といつて低い所にあつた。

子供の頃の心持は、今だに忘れられない。粽の外に、柏餅、赤の御飯などと考へて來ると、五月の節句を祝ふもので、何がなしになつかしい思を誘はないものはない。私達の少年時代は、まだ軒の菖蒲にも殘つて居るやうな氣もする。



鯉のぼり

この節句を祝ふ爲に、私の家の近所にも大きな幟竿が立つた。矢の形をした風車を竿の先につけたやつで、青葉に埋められた谷底のやうな私の家の前あたりからは、高く見上げるやうな位置にある。きのふの夕方、私はそこいらを歩き廻りに行つて、坂の下まで歸つて來ると、隣家の男の兒がお婆さんの背中につかまりながら、ぢつと岡の上の風車の動くのを見つめて居るのに逢つた。私は、またその男の兒の顏を見まもりながら、しばらくそこに立つて居た。漸く數へ歲の二つにしかならないやうな幼い子供にも、そんなに眼に映るものがあるといふことは、ある深い印象を私に與へた。（藤村讀本）

村井弦齋　名は寬。東京の人。小說家。昭和二年歿、年六十五。

伏見天皇　第九十二代。

一〇　心の修行

村井弦齋

伏見天皇の御代に、日本全國から刀工十八人を選び出して、各、一口づつの刀を徵されたことがあつた。その中で第

松倉　下新川郡松倉村。

鄕義弘　右馬允と稱した。建武頃の人。

正宗　相模國鎌倉町雪の下に住し五郎入道と號した。正應嘉曆年間の人。

一の選に當つた刀が天皇の御守になるといふのだから、諸國の刀工は皆畢生の腕を揮つてその刀を鍛へあげた。

當時日本一の刀鍛冶と、人も許し自らも誇つてゐたのは、越中の國松倉の人、鄕義弘である。義弘は、當時刀打つ業では恐らく自分の右に出づる者はあるまい、自分こそ必ず第一の選にあづかるに相違ないと待ちかまへてゐたところ、思の外に、相州の正宗が第一といふ事に定められた。義弘はこれを聞いて、彼正宗は刀を打つよりも世わたりの方が上手で、賄賂でも遣つてこの僥倖を得たのであらう。よし、それならば、これから相州に赴いて、一刀に斬つて棄てようと、決死の勢で、越中の國からはるばる相州鎌倉へ出かけて

往つた。

刀鍛冶

義弘は正宗の家に着くと、丁度仕事場には鎚の音が聞えたので、まづその窓から中の様子を覗つてゐたが、忽ち何を悟つたのか、今までの勢どこへやら、しをしをとして玄關へ廻り、刺を通じて正宗に面會を求めた。正宗は有名な義弘と聞いて、すぐに迎へ入れた。義弘は初對面の挨拶を懇懃に述べて、「さて正宗殿、何を隱さう、自分は今日貴殿と腕くらべして、様子によつたら貴殿

を討果す覺悟で参つたところが、今よそながら貴殿の仕事振を拜見して、自分の遠く及ばない事を悟りましたから、懺悔の爲にお話し申す。一體自分は酒好きで、仕事場に酒を置く事があり、暑い時には兩肌脱いで刀を打つ事もあります。今貴殿の刀を打たれる様を見ると、我が身のはしたない心掛けとは雲泥の相違、仕事場には神々しく注連を張り、隅々まで祓ひ淨め、貴殿も弟子も折目正しい袴をつけて、威儀堂々と鎚を取られる。その眼は少しも外を視ず、その心は少しも外に散らず、身も魂もその刀にのりうつるかと思ふばかり。それ程の丹誠を籠めてこそ、天下の名刀も打ち得られる事と感じ入りました。今まで腕一つで刀打つものと心得てゐたのは愧かしい。どうか今から貴殿の弟子として、心の修行をさせて下され。」と、懇ろに頼んだ。正宗は謙遜して一旦は斷つたけれども、義弘の熱心已み難いのを見て、遂に弟子にしたといふ事である。

室生犀星　名は照道。金澤の人。詩人。小說家。

一一　鮎のかげ

室生犀星

背なかにほくろのある鮎が
日のさす靜かな瀨のうちに泳ぎ澄んでゐる
幾列にもなつて
優しいからだを光らしてゐる
その影は白い砂地に

かげ繪のやうに
大きくなつたり小さくなつたりして
時にはぼやけたりする
水のかげまで玉をつゝつて
砂底へ落ちてゆく
ちひさな物音にさへ
花のやうに驚いては散つて
またあつまる鮎
すらりと群を拔いて大きな鮎が
とき〲群を統べてゐるのか
すこし瀨がしらへ出たり

ほこらしく高く泳いでは水面へ
ばちりとはねくり返る
しんとした波紋がする
あとは土手の上の若葉の匂がするばかり

（室生犀星詩集）

ふるさと

石川啄木

馬鈴薯のうすむらさきの花にふる雨をおもへり都の雨に

ふるさとの訛（なまり）なつかし停車場の人ごみの中にそを聞きにゆく

たはむれに母を背負ひてそのあまり輕きに泣きて三歩あゆまず

高濱虚子 名は清。松山の人。俳人。

上野 東京市上野驛。

土浦 茨城縣新治郡。霞浦にのぞむ都邑。

わかれをれば妹いとしも赤き緒の下駄など欲しとわめく子なりし

かにかくに澁民村はこひしかり思ひ出の山思ひ出の川

二 水郷めぐり

高濱虚子

この間、父さんは霞が浦から鹿島・香取へかけて旅行をした。そのお話をして聞かさうか。

上野を出る時がおそかつたから、土浦に着いた時分はもう燈火がついてゐた。櫻井といふ宿屋に泊つた。土浦といふところは、九萬石の城下であつたさうなが、夜見たところでは淋しいところであつた。それでも電燈はついてゐ

—水郷—

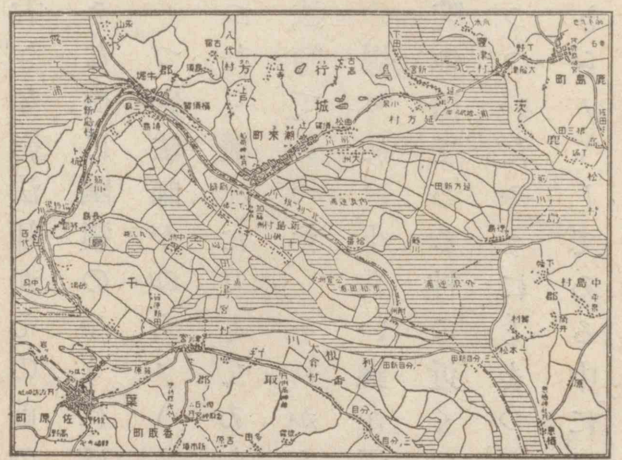
た。父さんが宿屋の二階の廊下に立つてゐると、父さんの大きな影法師がその前の廣い庭に刈込んである一つの大きな樹に幽靈のやうにぼんやり映つてゐた。と思ふと、も一つ影法師がゆら〳〵とその樹に映つて、父さんのと重なつたり離れたりしてゐた。これは下の廊下にゐる人の影法師であつた。それから、廊下の曲り角についてゐる電燈の周りには、小さい蟲が澤山飛んでゐたが、丁度その電燈の腕の出てゐる柱の近くの壁に一つの黒い蛾が、ぺたりとくつついたやうにとまつてゐて、他の澤山の蟲が埃のやうにきら〳〵してゐる中に、目だつて氣味わるくそれが靜まりかへつてゐた。父さんはよく旅をするが、それでも旅とい

兩國橋　東京市日本橋區と本所區との間、隅田川上に架する橋。

ふものは何となく淋しいものだ。

あくる日こゝから船に乗つたが、船といふのは、兩國橋あたりに行つて見ると、お前らも見るやうな外車の川蒸氣だ。

川蒸氣は、立つと頭がつかへるやうな低い天井の下に、鐵の火鉢が一つ置いてあつて、室の隅つこに積んである座布團を、めい／＼が一つづつ勝手にとつて敷いて坐るのだ。



水郷

船の乗合といふものは、一體に面白

霞が浦　茨城縣の東南隅にある。利根川に會して鹿島灘に入る。

麻生　茨城縣行方郡霞が浦の一要港。

いもので、今まで何も知らなかつた人が、急に知りあひになつて、一緒に乗つてゐる間話し合ひ、船が着いて上つてしまふと、もうそれつきり別れてしまつて一生逢はないのだから、なつかしいやうな淋しいやうな心持のするものだ。

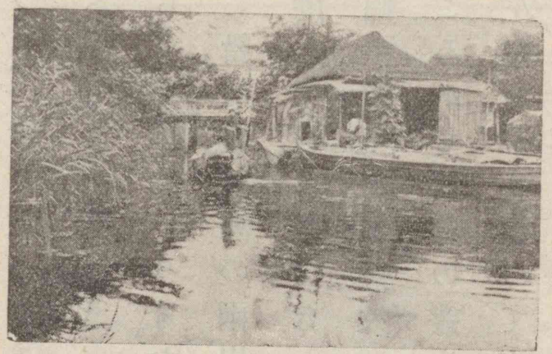
船は霞が浦の兩岸の漁村の主な處にかはりばんこに寄港して行くので、なか／＼時間がとれる。浦はだん／＼水幅が廣くなり、一大湖の感じがしてゐたのが、麻生を過ぎたころから、眞菰の叢生した平坦な洲と、やゝ小高い陸地とが左右からせまつて來て、そこはもう小さい川をなしてゐた。窓から首をつき出して行手を眺めると、その掘割のやうな川には、澤山の和船が、それ／＼荷物を積んでぎし／＼とつ

牛堀　茨城縣行方郡。霞が浦の咽喉を扼する要津。

潮來　茨城縣行方郡。北利根川の畔。

まつてゐた。そこへ殆ど川幅一杯ぐらゐと思はれる川蒸氣が進んで行くのであるから、どうなることかと思つてゐたら、行手の和船どもは、船頭が肩にあてた竹棹を弓のやうにしわらして、何れも力一杯に陸の方に片よせたので、蒸氣は速力をゆるめながら、そのあけてくれた水道の方に舵を轉じて進んで行つた。

そのうち牛堀といふ處を過ぎて潮來といふ處に着いた、父さんはそこに泊つた。



潮來十二橋

潮來は、伊太利のヴェニスの都を引合に出

すのは仰山かも知れぬが、兎に角水郷といつた樣な感じのする處で、丁度父さんの着いたのは六時過の日暮であつたが、田から歸る百姓は皆舟に乘つて、男や女が自由自在に櫓を漕いで、こちらの川や向うの川を三々五々と通るのであつた。さつき川蒸氣で通つた處は、此邊で一番廣い水であつたのだが、尙その他に澤山の川があつて、縱橫に田の間を流れてゐる。その川が往來の代りになつて、舟が車の代りになる點が、ヴェニスに似てゐると云へば云へるのである。

翌朝又こゝから川蒸氣に乘つて鹿島明神に參詣した。それは一時間ばかりで大船津といふ處に着いて、そこから俥で半道ばかりを行つて明神の社に着いたのであつた。

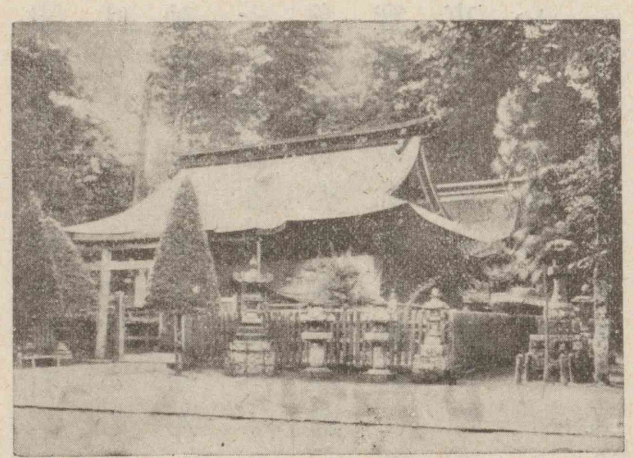
鹿島神宮 茨城縣鹿島郡鹿島町に鎭座、官幣大社。
香取神宮 千葉縣香取郡佐原町に鎭座、官幣大社。
息栖神社 同郡中島村息栖に鎭座。

鹿島香取息栖は、これを三社と稱へて、我國でも最も古い神樣として有名である。お前等は歴史で神武天皇の御東征の事を習つたらう。それよりづツと昔の天照大神の時分に、武甕槌命と經津主命といふ神樣を高天原からお下しになつて、出雲の方からかけて東國までを征服せしめられた。今でいへば東郷大將に乃木將軍といふやうなものが、この神樣たちであつたのだ。で、鹿島に

香取神宮

藤田東湖 名は彪。水戸藩士。幕末の志士。安政二年(二五一五)歿、年五十。

は武甕槌命、香取には經津主命が祀つてあり、息栖にはこのお二人と負けず劣らずに戰功のあつた神樣たちが祀つてある。昔からこの鹿島に參詣したのでは、大分有名な文章もあるが、中でも芭蕉の鹿島詣などは有名である。



鹿島神宮

鹿島神宮は小高い丘の上の鬱蒼たる森の中にあつて、社殿も莊嚴な建物が古びてゐて神神しい感じに打たれる。

お前等は藤田東湖といふ有名な

維新前の人を知つてゐるだらう。その東湖先生がこの御社に參つて作つた有名な詩があるが、その中にかういふ意味のことが云つてある。「世の中がどんなに變つても、この神樣の御氣象はちやんといつまでも傳はつてゐる。そのため我國が時々衰へようとするやうな時代があると、御氣象を受けた英雄が現れて來て、すぐそれを取りかへす。」と。實際この神樣の御前に額づくと、そんなやうな心持がする。東鄕大將や乃木大將はやはりその御氣象を受けた人々といへるであらう。

父さんはそれから又もとの大船津に出て、再び川蒸氣に乘つて霞が浦に浮かんだのである。川蒸氣は前の航路を

横利根川　霞が浦と利根川との間の水路。
大利根　利根川の本流。
佐原　千葉縣香取郡佐原町。

逆もどりして、昨夜泊つた潮來の前をも素通りして、牛堀から左に曲り、横利根川を通つて、大利根に出て、そこの佐原といふ町に船がかりして、その夜は船も佐原に泊り、父さんも山本といふ宿に泊つたのであつた。

この時の船の中で、頭の中にしつかりと殘つてゐる事は、もう船が横利根川に這入つた時分は全く暮れてしまつて、父さんは船窓の硝子に鼻をすりつけるやうにして、外の景色を眺めてゐたのであつたが、その時ぼうと赤い光が一つ行手に見えたと思ふと、段々それが近づいて來て、大きな和船がすうと傍を通りすぎた。その時であつた。最前からちら／＼と螢の飛ぶのが目についてゐたのであつたが、今

大きな和船の通り過ぎた向うの岸を見ると、そこには一本の大きな柳が眞菰の中に突き出てゐて、絲のやうな澤山の枝を水の上に垂れてゐる、その下の方が妙に明るいと思つて見ると、その柳の下から眞菰の中にかけて、螢籠を置いたかと思ふやうに澤山の螢がゐた。さうして柳の下に小さい一艘の小舟が、半分岸に引上げるやうにして置いてあつたのも、その螢の光でよく見えた。その後も水の上をすいと飛んだかと思ふと、忽ち又眞黒の闇になつてしまふといふやうな螢は度々見たが、こんな花々しい、併しながら又何となく物凄いやうな光景は、前後もう二度とは見なかつた。

朝、眼をさまして見ると雨が降つてゐた。俥を命じて早朝に香取神宮に參拜した。こゝのお宮もこんもりとした杉の中にあつて、お社も立派であつたが鹿島神宮に比べて東京から參拜に便利なためもあらう、一體が都近い心持がして、もの寂びたところが少かつた。

宿に歸るとまだ八時前であつた。船に乘つて銚子へ下ることにして、十時の出船を待合はすまでの一時間半ばかりの間――ちつと耳を澄ますと雨垂の音が聞える。障子をあけると、どこの港町にもよく見るやうに、中央には川が流れてゐる。それを夾んで二筋の道があつて、その兩側に人家がある。父さんの泊つてゐる宿もその中の一軒であるが、川を隔てて向うの家並の中にも何とかいふ宿屋が一

銚子　千葉縣銚子市。利根川口の港灣。

軒あつた。　川の兩岸を通る人や車は極めて稀だつた。一軒の家から鍋や釜を持つた一人の女が、頭に手拭をかぶつたままで、雨にぬれながら川岸の石段を下りて、その川の水で鍋や釜を洗ふのが、目立つて見えるほど人影は少かつた。けれどもその代り兩岸近くもやつてゐる苫を葺いた船は、氣持のいゝ程ぎつしりと詰つてゐて、その中に僅かに空いてゐる水道を、絶えず櫓を漕ぐ船や、棹をとる船が上つたり下つたりしてゐるのが、いかにも港町らしい一種の心持を傳へる。　それらをぢつと見てゐるといふことも、その場合、父さんにとつて堪へがたい淋しさであつた。

　十時前になると、川蒸氣は二三度汽笛を鳴らした。（虚子文集）

鳥居强右衞門　三河の人。德川家康の臣奥平信昌に仕へた。天正三年(二二三五)節に死す。年三十六。
湯淺常山　名は元禎。儒者。岡山の藩士。天明元年(二四四一)歿、年七十四。
勝賴　武田勝賴。
奥平九八郎　初め今川氏に屬したが天正元年父貞能と共に家康に歸して長篠城を賜はつた。
長篠　愛知縣(三河)南設樂郡長篠村。
東照宮　德川家康の謚。
織田家　織田信長。
雁峯が嶺　長篠城の西四粁。

一三　鳥居强右衞門

湯淺常山

　天正三年、勝賴、奥平九八郎信昌が三州長篠の城を圍み攻む。　東照宮援兵を織田家に乞はせ給ひ、後巻の謀をめぐらし給ふ處に、城中糧米既に盡きんとせしかば、此の旨を告げ奉らんため、鳥居强右衞門勝商に命じて密かに城を出す。鳥居「逃れ出づる事を得ば、向うの雁峯が嶺に煙をあぐべし。三日を過ぎて、又かの山に煙を兩度あげなば、後巻なしと知り給ふべし。　三度あげなば、後巻あることを知り給へ。」と約しければ、信昌、鈴木金七郎を鳥居にそへて遣はす。

　五月十四日の夜、城の西なる山の岩根をつたひて川に入

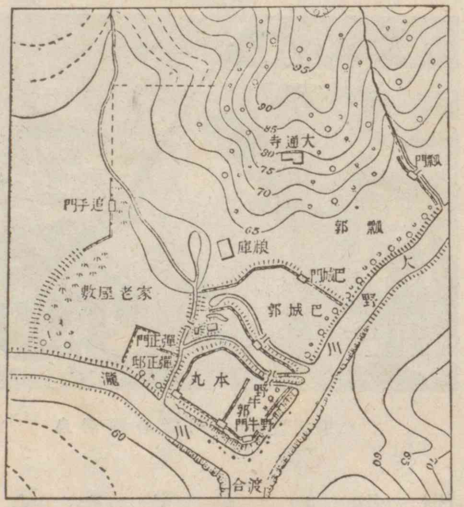
廣瀬　長篠城の南二粁。
十五日　天正三年五月。
岡崎　德川家康の居城。

る。寄手素より大野川・瀧川の水底に繩を張りて、鳴子を懸けたれば、通るべきやうもなし。二人は水練の達者にて、川の淺瀬はよく知りつ。小脇差を拔きて、川底を潛り、繩を切つて通りしかばから〱と鳴りけるを、番の兵ども怪しみけるに、其の中に一人「五月雨にはかゝる川をば鱸の通るならん。」と言ひければ、さて止みぬ。二人は早瀧の下廣瀬といふところに上り、雁峯が嶺にて煙をあげ、十五日に岡崎に參りて、しか〲の由を申すところに、信長其の日岡崎に着陣せらる。鳥居は「信昌なほ心許なくや候ふらん。忍びて城に入ることを得ば、はや後卷候ふべきこと、審かに申さん。」とて引返す。鈴木は「信昌が父、美作守貞能に告ぐべし。」とて、鳥

篠原　長篠城の西南瀧川を隔てゝ相對する處。
穴山　穴山梅雪。信玄の姉の子。
信綱　信玄の弟。

居に別れけり。

鳥居、雁峯が嶺に上り、合圖の煙三度あげて後、篠原といふ處に往き、忍び入らんとするに、柵嚴重にして砂をまき、出入の人の足跡をあらためしかば、なか〱入るべき樣なくてためらひけるを、穴山の手の者見つけて、怪しみて遂に搦め取りけり。勝賴、逍遙軒信綱を以て子細を問はるゝに、鳥居、事の由をありのまゝに答へしかば、勝賴、鳥居を呼んで「汝が命を助くべし。汝、城



長篠城要圖

一宮　愛知縣(三河)寶飯郡富村にある。長篠の西南六粁餘。

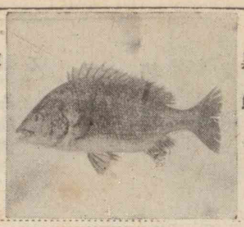
野田　愛知縣(三河)南設樂郡千秋村にある。長篠の西南九粁餘。

際に往きて、『信長は上方の軍にて、此の城の後巻思ひも寄らず。』といはゞ、城兵降參すべし。さらば汝に厚く賞せん。」といはれしかば、鳥居乃ち「心得候。」とて、城門近く至り、「後巻とて、信長御父子、岡崎まで昨日旗を出され、先陣は一宮に陣せり。德川殿父子、野田まで御馬を出されたり。此の城、運を開かんこと掌の中にあり。」といひければ、甲州の者ども大いに驚き、鳥居を引連れて、勝賴にかくと申せば、勝賴大いに怒つて、城に向け磔にして殺しけり。

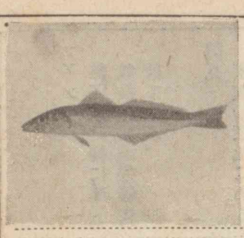
鳥居强右衛門（小山榮達筆）

作手　愛知縣(三河)南設樂郡。長篠城の西方八粁。

佐藤惣之助　神奈川縣の人。詩人。



黒鯛



鱚

長篠にて勝賴敗北して後、信長を始め、鳥居が「無雙の忠なることを感じ作手の甘泉寺に懇ろに葬られけり。（常山紀談）

一四　黒鯛つり

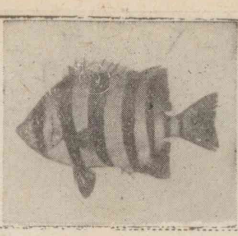
佐藤惣之助

釣は夏、夏は黒鯛、月下に荒浪をあびて婆娑と釣り上げる獲物は、黒銀の扇だ。

今年は鮎も釣れたが、海の鱚が豐漁で、六七月は二本竿で一日に二百尾からの鱚を釣りあげた。此奴海の鮎である。鼻つ張りの强い、とーんと手應へのある、淺瀨の三日月だ。然しどういふものか、今年は五月にちよいと「かいづ」が出たきりで、「めばる」もあまり來なかつたが、いよ〳〵八月の當り

ファン　熱狂家。特に運動競技映畫娛樂等に就ていふ。

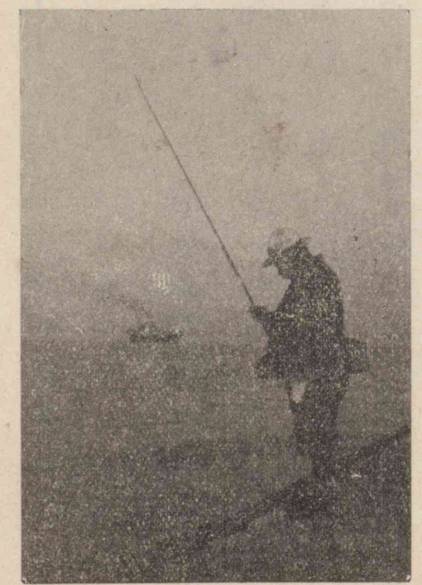
鶴見　横濱の東北にある地。今横濱市に入る。


縞鯛

月、尺餘の黒鯛がやつてくる時なので、ファンは今から天蠶糸を結ぶに夢中である。殊に浦賀や房州まで出掛けて十五六尋で釣るのは大骨だが、横濱・鶴見の防波堤なら、一尋半で二間半の長竿へ樂に來る。

昨年は私も大物に二三度出逢つたが、愉快だつたのは年なしと云ひたい位の縞鯛に、一週間位毎夜出られたことだ。此奴圓くて、重量があつて、知らずにゐる内に喰ひ込んでゐて、いざとなるとなか〳〵水を出て來ないばかりでなく、ひらりと二度「跳」られたら遁がしてしまふし、よく喰ひ込んでゐても大抵の天蠶糸はぶつりと切られてしまふ。「畜生ツ」と思ひながら、毎夜絲を切られるので、最後には竿を寝かして、防波堤を小半町も這つて、やつと姿を見せてから、恥晒しにも他人に玉網を入れてもらひ、さうしてやつと上げるやうにしたが、料理しては黒鯛以上、縞鯛の味噌燒は天下一品だといふ氣がした。

尤もいくら重いと云つても縞鯛は鈍重だ。やつぱり黒鯛の大物の潔い喰ひ込みや、潮ばなれの荒い興味に如くはない。然し黒鯛もあまり大物は面白くない。手頃なのは三年四年の奴、五年位までは玉網なしでぐいとぬいてしまふ。その瞬

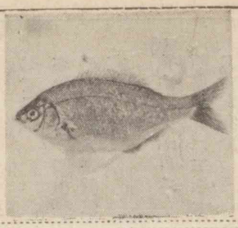

横濱港防波堤に於ける黒鯛夜釣

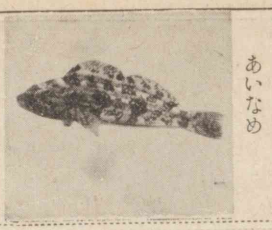
本牧　今横濱市中區の町名。東京灣に突出し横濱港の南角をなす。

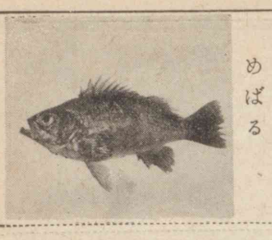
三崎　神奈川縣三浦半島の先端にある漁港。

間、尾鰭を逆立てゝ黒銀に發光するのを「手摑」みにすると、此方の手も血になる。半身以上激浪をあびたつて、何のその、摑んだ獲物は放さない。しかもそれが「漆黒」の闇夜ほど興味がある。

近くて便利で、川より興味のあるのは京濱間の海だ。今年は私は鮎をあきらめて海一方にしてゐる。鶴見をちよいと乗り出すと、本牧沖で「鯵・鯖」が來る。烏賊も來る。釣つた烏賊に墨を吹かれて、シヤツを眞黒にしたり、斷末魔の烏賊が怒つて吼えるなぞは奇觀だ。小鯖は四尋ぐらゐのところでぽん〳〵釣れる。鯵も港內までやつて來るが、本當は横須賀・三崎まで出掛けなければならない。


沖たなご


あいなめ


めばる

晝釣は暑くてたまらないから、勢ひ夜釣にする。夜は黒鯛が目的で縞鯛・沖「たなご」・「あいなめ」・「めばる」も釣れる。それに何より涼しいのが千兩だ。セーターに冬シヤツ・古背廣でも冷い。遂に「頰冠」して、冬帽で風を避ける。夕方出て十二時近くに歸る。朝には手足が白つぽくなつてゐる。まるで暑さ知らずだ。

よく大物につられて徹夜をしてゐると、眠くなつて月下の防波堤へ、ころりと寢る。風が落ちて海もしんとしてゐる。その時分に根氣のよいのが、水面をばさ〳〵いはして大物と闘つてゐる。こつちも飛び起きて又初める。定つて滿潮で、風の落ちた眞夜中に、尺二三寸の大物がぐいとや

薄田泣菫　名は淳介。岡山縣の人。詩人。隨筆家。

ロイド、ジョージ　西暦一九二二年十月首相辭職。

つて來るものだ。

猶、風のない晩は「あなご」もよい、船に行燈をつけて釣る古風な釣だ。銀河も明かに、肌は秋風を感じる。眞夏の中の秋感だ。落方の月を額にしてつる〳〵と「あなご」をあげる趣味は又格別である。夏三ケ月、私は海の鳥だ。夕方になると冬仕度で海へ行く、船も乘合で六十錢、こんな安い「避暑法」はない。何を苦しんで灼熱の旅行などして居られよう。

一五 人間の大小

薄田泣菫

世界大戰で、聯合軍側の大立物は、何といつても英國首相ロイド、ジョージ氏を第一に推さねばならない。其の大立

ウエールス　英國の州の名。

物のロイド、ジョージ氏がウェールス生れの、身長の低い、やつと五尺そこ〳〵の小男だとは知らない人が多い。

ロイドジョージ

戰爭中の或年の春だつた。ロイド、ジョージ氏が南ウェールスの或都市へ演説に出かけたことがあつた。無論戰爭に關する演説で「自惚」好きな英國人が、首相の口から直接ドイツ文明が安物のぼろつきれであることを聽くための催しだつた。

其の演説會の司會者といふのは、大のロイド、ジョージ崇拜者で、此の政治家の試みた演説は、どんな「詰」らないもので

も、悉く新聞を切抜いて、手文庫に仕舞つておくといふ風の男だつた。だが、これまで一度も、此の自分の崇拜する人に出會つたことが無かつたので、其の日は朝から胸をわくわくさせて待つてゐた。

會場には聽衆がぎつしり詰つてゐた。

當日の演説家を案内して會場へ入つて來た身長の高い司會者は、まづ起つて、此の名高い政治家を聽衆に紹介したが、其の中に次のやうな言葉があつた。

「私は不斷から此の偉人を崇拜してゐましたが、正直に申しますと、體のもつと大きい、見かけの堂々たるお方だとばかり思つてゐましたのに、今日初めてお目にかゝつて、實は驚いたやうな始末で。」

次いで起つたロイド、ジョージ氏は、小さいが、しかし胡桃(くるみ)のやうな、かつちりした體を演壇に運んだ。

「唯今承りますと、今日の司會者は、私にお會ひになつて、ひどく失望されたやうな御様子で、まことにお氣の毒に堪へません。」

と、首相は背高(のつぽ)な司會者の方へ皮肉な眼付を投げた。

「だが、今承つて始めて氣付いたのは、私どもの北ウェールスと當地とでは、人間を測る標準が違つてゐるといふことです。南ウェールスでは、人間を頤から下の大きさで測るらしいが、私どもの北ウェールスでは、其の反對に、頤から上の大きさで大小を定めることになつてゐます。」

大町桂月　名は芳衞。文章家。大正十四年歿、年五十七。
酒匂　神奈川縣小田原の東北。
伊澤先生　名は修二。教育家。貴族院議員。晩年樂石社を起し吃音矯正の事に從ふ。大正六年歿、年六十七。

かういつて、ロイド、ジョージ氏は自慢の大きな頭を肩の上で振つて見せた。聽衆は譯もなく嬉しがつて、頤から下の馬鹿に大きい體を搖ぶつて喝采した。（新茶話）

一六　親ごころ

大町桂月

一　酒匂なる二兒へ

毎々手紙くれてうれしい。伊澤先生が二十日まで居るがよからうとの御手紙故、そのつもりにて大いに勉強すべし。十五六日頃一寸行くがも知れぬが、二十日には必ず迎へに行く。土産物はその時ゆつくり買ひてよかるべし。

先生よりの御手紙に、「決して父の言語を眞似してはならぬ。」といふことをお前達に誓はせるとの事ゆゑ、お前もそのつもりにて、先生の言はるゝ事を承るべし。

この父の吃音の眞似させたくなきは言ふまでもなし。その外缺點もあり、惡癖もあり。世上どんな人でも長所と短所とあるものなり。然るに、人は他人の短所には氣がつき易けれど、他人の長所には氣がつきにくきものなり。この父の短所多けれど、男らしいといふ氣象は大いにもつて居るなり。これはお前達が年長ずるにつれて

大町桂月

分つてくる。文章も決して人後に落ちぬなり。この二點は大いに眞似して可なり。

「餓ゑては食をえらばず」と、古の人が言へり。お前達は肴が嫌ひなるが、餓ゑたら必ず食へる。嫌ひでも食つてをれば終には好きになる。何かの罐詰でも送ることはわけもないが、それでは却つてお前達のためにならぬ。長じて兵隊に出たり、旅行したり、人の家に行つたり、その他いろ／＼の時に困る。人は食物に好き嫌ひあるが如く、萬事氣隨氣儘になり易し。氣隨氣儘では世は渡られぬ。何事も辛抱が大切なり。この儀よく／＼心に銘すべし。今日は父も母も忙しくて郵便局へ行けぬから、爲替は明日あたりおくる。（桂月全集）

二　米澤なる愛兒へ　　五十嵐力

五十嵐力　米澤の人。國文學者。文學博士。早稻田大學敎授。

度々手紙をくれてうれしい。お前方が立つてから家の中はピンカラリン、まるで大風の吹いたあとの様で、鼠に引かれさうな淋しい日を送つてゐる。あの小坊主(お前の事)を淋しい時だけ取りよせて傍において、やかましくて困る時は、電氣仕掛で國へ送つてやれたらよからうなど云つては、生きた人間が、まさかさうもなるまいなんて、馬鹿話をする事も度々ある。

親類まはりや、山登りや、溫泉あるきや、水泳や、魚釣り

謙信公　上杉謙信。
上杉神社　別格官幣社。米澤舊城の中央にある。
鷹山公　上杉治憲、出羽國米澤城主、文政五年(二四八二)歿、年七十七。

で大分忙しい樣子、結構だ、結構だ。好い空氣を吸つて、うんと遊んで、これから一年の間勉強する元氣を養つて來るがよい。但しその間に朝一二時間の數學・英語その他のお稽古、これは是非ともやらねばなりませんぞ。

上杉鷹山

お墓參りに行つたら、よく御寺の樣子を見て、歸つてから報告なさい。先祖樣のお墓、お祖父樣・お祖母樣の御墓には、取りわけ立派に御辭儀をしていらつしやい。それから謙信公の上杉神社、鷹山公の松岬(まつがさき)神社へも是非參詣して、尙お婆樣達から謙信公・

鷹山公のお話をよく伺つていらつしやい。それから若し暇があつたら、御廟山(ごべうざん)に參詣して、上杉家の御廟所の左手の前に、今から百數十年前のお祖父樣――鷹山公に御奉公して家の先祖樣達の中で一番立身したお方――の献納なすつた石の燈籠が立つて居り、それにその御祖父樣の名と献納なすつた年月とが刻んであるが、それを見て、わが家は米澤藩の中でも卑しい家柄ではなかつた、吾々も先祖樣達の御顏をよごしてはならぬといふ事をよく考へていらつしやい。

明日は八月だ。もう二週間ばかりでお前に逢へると思ふと、中旬が待遠でならぬ。達者で歸つて來るん

巣鴨　東京市豐島區巣鴨町。一六一六は住宅の番地。

前田晁　山梨縣の人。文學者。

だぞ。よいか、病氣をせずに、怪我をせずに、巣鴨の一六一六に歸つて、二の間の蚊帳の中へお母様達と一しよに寢て、そして井戸に冷したサイダーを飲むんだぞ。

あとは明日、左様なら〳〵。（わが書簡）

○

橘曙覽

たのしみは稀に魚煮て兒ら皆がうまし〳〵といひて食ふ時

たのしみは家内五人五人が風だにひかでありあへるとき

たのしみは三人の子どもすく〳〵と大きくなれる姿見る時

一七　手紙の懷かしさ

前田晁

手紙といふもの位あはれに懷かしいものはない。獨りで寂しくてたまらずにゐるやうな時は勿論のこと、

さうでない時でさへも「郵便！」といふ高らかな配達夫の聲を玄關の方に當つて聞きでもすると、「幸福」が舞込みでもしたやうな嬉しい心持のするものである。「何處から來たのだらう。」「誰から來たのだらう。」かういふ考が忽ち浮んで來て、その郵便物を手にするまでの樂しさといつたらない。いよ〳〵それを手に取つて、封を切つて見る段になると、その手紙の種類によつて、喜にも度合が生じてくる。最も嬉しく思はれるのは、やはり何といつても、親友の蔽ひ隱しのない胸を開いたやうな手紙である。暫く逢はなかつた場合なら勿論のこと、さまでてない時でさへも、心と心と相許した親友同志が、向ひ合つて心の中を語り合ふ

やうな手紙に接すると、俄かに自分の胸も開けて來て、先刻までの寂しさなどは何時の間にか雲散霧消してしまふ。

遠く故鄕を離れてゐる者にとつては、生家からの消息もまた懷かしいものの一つである。「この頃の氣候はどうも不順であるが、其許には別段の障りもないか。こちらは一家打揃つて無事にくらしてゐる。天候が定らぬので作物の出來榮はどうかと思つてゐたが、先づ〳〵この分ならば、この先天氣さへつゞけば豐年だらうと思ふ。その邊には何の懸念もなく、其許は專心に勉强するがよい。」かういふ手紙は、大抵きまつた文句を並べることが多いものだが、それでも、それを書いた人が年とつた父親であるとか、優しい

母親であるとか、兄であるとかで、自分に親しい筆蹟を見ただけでも、樣々なことが故鄕といふ觀念と共に聯想されて來て、他人の手紙などに比すれば、凡そ幾倍の興味があるか知れない。

ふだんならばうるさく思ふやうな用事の手紙でさへも、時に依ると、また久しく待たれたもののやうに嬉しく讀まれることがある。例へば、思ひ疲れてたゞ茫然としてゐる時などは、さういふ手紙に接したために、自分の立場や周圍を改めて明かに見やることまで出來て、心の緊張を覺え、世間に處して行く上に於ける力と用意とを、更に新にするといふやうなこともある。一體人の頭といふものは、時折何

水上瀧太郎　本名は阿部章藏。東京の人。文學者。

等かの刺戟を受けぬと、やゝもすれば次第に腐つて行つて、終には、因循になつたり姑息になつたりしたがるものだ。

手紙を受取つた時のかういふ純な喜を思ふ毎に、私はまたこちらからも胸を開いた、眞情の流露したやうな手紙を書いてやつて、人にも同じ喜を味ははせたいと思ふ。

（生きた文章の道）

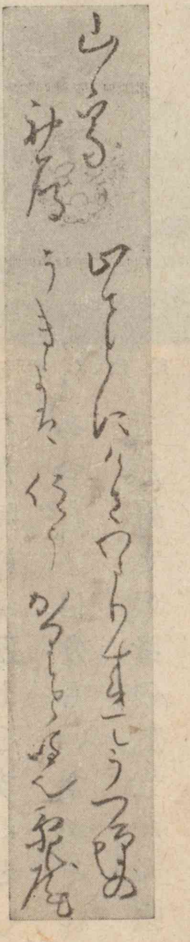
一八　無線電信

水上瀧太郎

「日本に通じる無線電信は、今晩でおしまひだ。」と、電信局の人が注意に來てくれた。

カウカイブジ。

といふやうなのが、いくつもいくつも繰返されて居るのである。自分も父母を喜ばせるために、何かひとこと言ひおくらうと思つたが、無事といふ以外に、言ひたいことは何もなく、たゞ無事といふだけでは、あんまり物足りなさ過ぎるので、手帳を出して、あれこれと、近頃の自作の歌の中から、適當なのを選ばうと思つた。



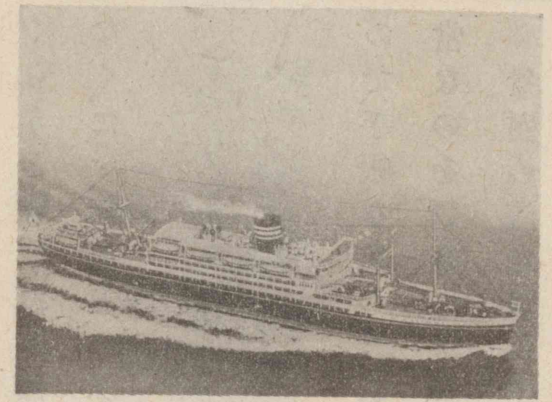
香川景樹筆蹟

景樹の流を汲んで和歌をよくする母は、自分達兄弟姉妹が、時折父母の家を離れて旅にでも出た時とか、母自身が家

筆蹟　山家初雁　山さとにけさわたり來てうつ蟬のうきよは住うかりと鳴（く）也　景樹

景樹　香川氏。號は桂園。鳥取縣（因幡）鳥取の人。江戸時代末期の歌人。

を留守にした時に、必ず我等に對して、子を思ふ親心を、三十一文字にこめて書きおこすのであつた。見やう見まねで、兄も姉も、幼い時から歌をよみ習ひ、母から送られた時には、返しをするといふ風であつた。自分もいつかそれに習つて、旅好きの身の、旅先から、强ひても母の好きさうな古風な歌を詠みだしては、書送るのを習としてゐた。



洋上を行く汽船

丁度この夏も、自分は、自分の拙い歌を拙い文字に認めた行くさき／＼の、うまやぢからの繪葉書の、いかばかり母を

慰めるかを想ひまた知る人の訪ひ來るまゝに、いかに母が誇りかに人々にそれを示すかを想像しながら、九州路の旅に日を暮らした。

しかし、今自分の手帳には、旅の歌が一首もなく、船に乗つてからも、時折はきれ／＼に浮ぶ想ひを歌はうと努めはしたけれども、どういふものか、どうしてもそれがまとまらないのであつた。幾たびも／＼短いありふれた句を、手帳に書いては消し、書いては消したあとで、あれこれとつなぎ合せて、漸く次の一首にまとめたのである。

ヤスラカニウミノイクヨハアケニケリチチハハノ
イヘコヒシトオモヘド・

自分はその電報が、恰も父の寢酒の時刻にわが家に着くやうに、無線電信係の人に頼みこんで、それで今日は一層安らかな心になつた。

父は近頃とみに量の少くなつた酒に陶然としながら、「なんだ、つまらない。」といふやうな顔をして見るにちがひない。しかし、その心中の嬉しさは、隱さうとしても隱しきれず、見ないやうな風でゐながら、電報の歌を諳んじるにちがひない。母はもうたまらなくなつて、目がしらに涙をにじませながら、幾たびも〱口ずさんだ後、妹にも、弟にも、さては女中達にまでも讀み聞かせるにちがひない。明日からは、あの家の夫人、その家の奥さん達に逢ふ度毎に、わが子の歌を唇に上せるにちがひない。自分にはよくそれが見えるのであつた。（海上日記）

一九　乃木將軍

森　鷗　外

一

つはもの丶武勇なきにはあらねども
眞鐵なすベトンに投ぐる人の肉。
往く者は生きて還らぬ强襲の
鋒をしばし轉じて、右手のかた、
圖上なる標の高さ二零三、
巓の二つ聳ゆる石山に

乃木將軍　名は希典。陸軍大將。伯爵。大正元年歿、年六十四。

森鷗外　名は林太郎。島根縣の人。醫學博士。文學博士。大正十一年歿、年六十一。

ベトン　コンクリートの一種。

二零三　二百三高地。爾靈山ともいふ。標高二〇三米突。

霜月　明治三十七年。
高崎山　高崎聯隊で占領したのでかく名づける。
柳樹房　旅順口の東北。攻圍軍總司令部の所在地。
曲家屯　二〇三高地の北。双島灣の東。

たえ〳〵の望のいとを懸けてこそ、
きのふけふ軍の主力を向けてしか。

二

霜月の三十日の夕まぐれ、
將軍は高崎山の師團より
たゞ一騎、柳樹房なる本營に
歸らんと、曲家屯をぞ過ぎたまふ。
ほの暗き道のほとりを見たまへば、
身うち皆血に塗れたる卒ありて、
そびらには、はやこときれし將校の
亡骸をかきのせてこそ立てりけれ。

勝典　乃木將軍の長子。陸軍歩兵大尉。明治三十七年五月二十六日戰死、年二十六。
保典　乃木將軍の次子。陸軍歩兵少尉。明治三十七年十一月三十日、二〇三高地で戰死。

三

「汝は誰ぞ。そを何處にか負ひてゆく。」
「聞こし召せ、背負ひまつるは奴わが
主と頼む乃木將軍の愛兒なり。
年老いし將軍の家の二人子、
そのひとり勝典ぬしはいちはやく
南山にうたれ給ひて、殘れるは
おとうとの保典のぬしひとりのみ。
背負へるはその一人子の亡骸ぞ。

四

父君は心をゝしく、我が主をも

友安旅團 陸軍少將友安治延の率ゐる後備步兵第一旅團。二百三高地占領に最も奮戰した隊。

隊附のまゝにあらせて、『討死の身の果はおのれと三人、葬をばひと時に營め。』と宣り給ひしを、人々の強ひて計らひつるにより、さいつ頃友安旅團の副官に職かはり、まだ程經ぬに、この朝開あへなくも空しき骸となりましぬ。

五

果てましゝ處は高地二零三。目鏡もて敵の備を望みますうら若き額のたゞ中打ちぬかれ、

この村 曲家屯。

ひと言をのたまはんひまもなく持口の南の峰にうせたまふ。

乃木將軍

その骸を奴背負ひて、この村にありと聞く野戰病院たづぬれど、

くるほしき心からにやたづね得ず。」

六

かくいふを駒をとゞめて聞きまし、
將軍は、病院の旗ある方を、
鞭あげて「彼方にこそ。」とさし給ふ。
面ざしはかはたれ時に見えねども、
目ざとくも雲の絶間ゆ覗ひし
さむ空にまだ輝かぬ冬の星、
更闌けて、友なる星に、「將軍の
睫毛だに動かざりき。」と語りけり。

（うた日記）

—庄野の白雨（廣重筆）—

國富信一　東京の人。中央氣象臺技師。

鬼貫　俳人。姓は上泉。元文三年(二三九八)歿年七十八。

二〇 雲の峰

國富信一

夕立や隣在所は風吹いて

といふ鬼貫の句がある。

篠つくやうな大雨が降つてゐるかと思へば隣在所にはそよ風が吹いてゐるといふやうに、極めて局部的なのが夕立の特性である。　昔から、夕立は馬の背を分けるといつたのもこのことで、誠にきび〳〵とした男性的なものである。

夕立の降る時間も一般に極めて短く、一時間を越えることは珍しい位である。　それ故、強雨に遇つても、それが正しく夕立であるなら、雨宿りをして止むのを待つに限る。　夕立

丈草　俳人。姓は内藤、名は林右衞門。芭蕉の弟子。元祿十七年（二三六四）歿、年四十五。

其角　俳人。榎本氏。芭蕉十哲の一。寶永四年（二三六七）歿、年四十七。

麥水　俳人。堀田氏。天明二年（二四四二）歿、年六十三。

の降る時間の短さをよんだ句として、

夕立に飛びのく月や松の上　丈草

などは面白いと思ふ。

また夕立の時の雨宿りの樣や、人の驅けゆく樣などは、氣の毒とはいひながら、第三者として見ればなか／＼趣が深い。私なども子供のころには、夕立となると必ず窓によりかゝり、電光を浴びながら外を眺めてゐたものである。

夕立や法華驅込む阿彌陀堂　其角

馬ながら軒へ驅込む夕立哉　麥水

*

夕立は冬にもあるが、然し殆ど夏に限られたものといつ

てもよい位夏に多い。なぜ、それならば夕立は夏に多いだらうか。勿論これは、夏の強い日射が主な原因となつてゐることは誰しも直ぐに考へつく所であらう。

夏になると日射が強くなる結果として、地面は強く暖められる。さうして暖められた地面に接してゐる空氣もまた暖められて膨脹し、氣壓が下つて輕くなる結果、高い所へ上昇して行く。これが上昇氣流といふものである。

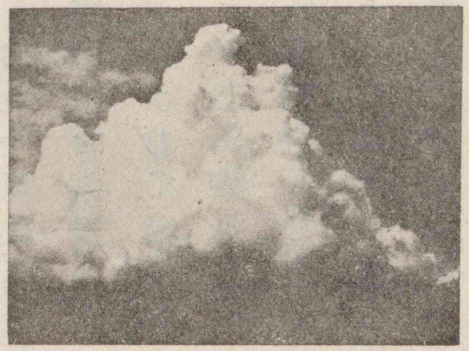
日射の結果上昇氣流が盛になると、昇つて行つた空氣は高い所へ達し、上層の氣壓の低い所へ行くに從つて益膨脹して溫度が低下する。さうして遂にはその溫度は零點に達し、中に含まれてゐる水蒸氣は凝結して、小さな水滴とな

つて雲を生ずる。

上昇氣流が盛なときには、昇つて張つた空氣は雲を生じても、なほ上昇を續けるから、これから上の方では、雲の形によつて、上昇氣流の有樣がよくわかる――それは恰度煙突から吐き出される煙のやうに、むく〳〵とした形になる。かうして上昇を續ける雲は、上昇の勢ひが強いときには優に十キロ以上も昇つてゆき、むく〳〵と盛上つてゆく頭が、まるで入道のやうに見える。このやうな雲は全く夏にのみ限られて現はれるものであつて、入道雲とか、雲の峰とかいはれてゐる。學名は積亂雲と呼ばれる。

*

紺青のやうな夏の海、碧空を背景として群れ飛ぶ鷗、さうした和やかな景色の中に、遠い空にむく〳〵として立つ雲の峰は、夏といふものにふさはしいものである。



雲の峰

然し雲の峰の雄大さは、何といつても高山の頂、例へば富士の山頂あたりから見たものであらう。御來迎の一閃と共に、今まで身ゆるぎもせずに眠つてゐた谷々から、先づ白雲の躍動が始まつてくる。これが日の昇るに從つて激しく、はては己が足下を目がけて奔騰し始め、更に高く昇つて

は雲塊重疊として、今にも頭上に崩れ落ちんばかりの勢を示し、飛電閃々と雲間を縫つて走る。

此の壯觀は、夏の登山者の多くにのみ許される大自然の繪卷物である。

かうして渦巻きつゝ上つて行つた雲の峰も、登りつめてその上昇勢力を失ふと、上層を吹く風のために頭部が水平に押流されて、舌のやうな形となつて風下へ伸びてゆく。その時の雲の形は、恰も鐵砧のやうになるところから、特に鐵砧雲の異名がある。さうして風下に押流された雲の峰は、その延びてゆくさき／＼に強雨を降らし、電雷を起すのである。

※一 夕立の時には、必ず電雷を伴ふやうであるが、これもまた雲の峰の中に藏された雷氣によるのである。

雲の峰雷を封じて聳えけり　漱石

雲の峰の中に雷氣を含んでゐる原因としては、色々な説もあるが、確からしい説によればかうである。今、水が地物などに當つて飛沫するときには、水滴と空氣の分子とは兩者反對に帶電せしめられる。同様に雲を作る水滴が上昇するときは、水滴と空氣分子とは矢張り反對に帶電する。かうして雲の峰は上昇の途中、帶電によつて得た電氣量を多分に蓄積してゐるから、これが崩れて風下の方へ押しよ

漱石　夏目漱石。

せたときにも、その雲中には多量の電氣を持つてゐる。さうして遂には雲と雲、雲と地面との間に放電現象を起して、電雷落雷の現象を起すのである。

かやうに眞夏のころ赫々たる日に照されて、うだり果てた午後など、遠くに立つ雲の峰が崩れ落ち、またゝく間に紫電一閃、覆盆の如き大雨沛然として降りくるなどは、實に涼味滿喫である。

稲妻やうつかりひよんとした顔へ　一茶

○

庭の面はまだ乾かぬに夕立の空さりげなく澄める月かな　（源　頼政）

旅籠馬荷の緒かためて道いそげ野風夕立ち雨こぼれきぬ　（井上文雄）

一茶　俳人。姓は小林。俳諧寺とも號した。文政十生(二四八七)歿、年六十五。

二一　グラフ、ツェッペリン號に乗つて

圓地與四松

八月十九日。

午前六時起きる。今日は霞ケ浦着陸の日である。少し靄がかゝつてゐたが、日が照り出すと、すつかり日本晴に晴れわたつた。

午前七時頃から北海道を横斷し始めて、七時半には内浦灣に出た。北海道の地にさしかゝると、そこの燈臺に日の丸の國旗を出して我々を歡迎してくれたのは、實に嬉しかつた。諸所の村落でも、村人達が往來に出て仰ぎ見て、ハンケチを振つたり、旗を振つたりしてくれた。海の上に出て

グラフ、ツェッペリン號　獨逸航空界の覇者ツェッペリン伯の名を冠した飛行船。

圓地與四松　石川縣の人。元東京日日新聞社員。

八月十九日　昭和四年。

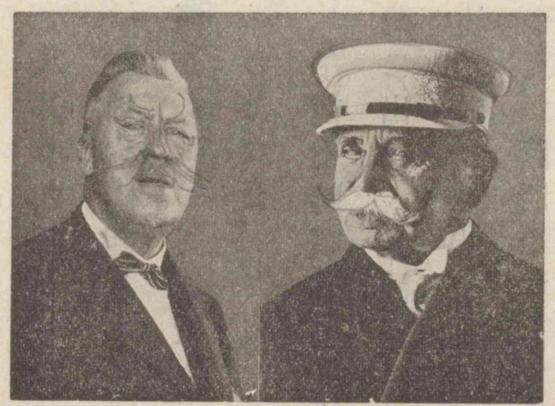
霞ケ浦　茨城縣にある大湖。西岸に海軍航空研究部及び航空隊がある。

内浦灣　渡島・膽振兩國に包まれた灣。

駒ヶ岳　渡島北部の火山。
エッケナー博士　此の飛行船の總指揮官。
レーマン船長　此の飛行船の船長。

からも、ずつと右手に北海道を眺めながら進んだが、八時半頃には遙かの彼方、右手に駒ヶ岳を眺めることが出來た。

北海道を去つてからは、みちのくの山河を右に見ながら進む。空は全く晴れわたり、美しい故國の山々が遠く近く蜿蜒として連なり、海上には又小さくも可愛らしい發動機船が躍つてゐる。乘客は、誰一人この美しい日本を歡賞せぬものはなかつた。



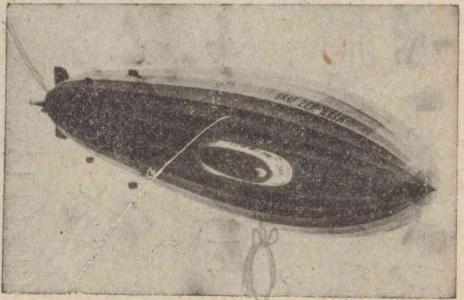
ツェッペリン伯（右）とエッケナー博士（左）

午餐の時、エッケナー博士もレーマン船長も極めて嬉しさ

イセリン君　スイス國の退役陸軍中佐。
アルパカ　アルパカといふ獸の毛をまぜて織つた布。
北野君　大阪朝日新聞記者北野吉內。

うであつた。

次第に夏らしく暑くなつて來た。イセリン君の如きは、もうアルパカの上着に着換へてゐる。そして「もう暑くなつたからね。」と得意になつてゐる。午後二時になつた。誰も落ちつかない。たゞはち切れさうな期待で東京の空へ出ることを待つてゐる。折柄樺太廳長官縣忍氏から、北野君と私とに宛てて「今回天空一周の壯擧を企てたるツェッペリン伯號を日本帝國において最初に樺太の上空に迎ふるは衷心歡喜に堪へず。全島民



ツェッペリン伯號

太田　茨城縣久慈郡太田町。
牛久沼　茨城縣稻敷郡牛久村の西部にある沼。
ホール　廣間。
カメラマン　寫眞師。

を代表して深甚なる敬意を表す。貴下並に乘組員各位の御健康を祝し、絶大なる成功を祈る。」といふ電報を寄せられた。午後二時、三時となるに從つて、日本人の記者は忙しくなるばかりだ。私はこの筆のつゞく限り書きつゞける決心である。

午後三時二十五分には四臺の飛行機が來て、我等を迎へてくれた。その中に本社機も見えた。三時三十五分には太田を通過する。人々は皆往來に出て仰いで眺めてゐる。

私は大急ぎで荷物を片づける。その間にもう牛久沼に來た。時に四時十五分である。漸く荷物の仕度を濟ました私は、ホールへ出て來ると、カメラマンは大急ぎで相呼應

藤吉少佐　海軍少佐藤吉直四郎。
タイプライター　印字機。

しながら、撮影に忙しい。

はや利根川だ。「もう何十分で東京か。」とイセリン君が聞きに來る。そこへ藤吉少佐が飛んで來て、「航空司令に電報を打つのだからタイプライターを打つてくれないか。」と賴んで來る。「今より東京橫濱を廻り、六時より七時の間に着陸す。」といふ電報である。かうしてゐる間にも、いろ〳〵の人がいろ〳〵なことを聞きに來る。地上の人達は、今私がこんな忙しい思をしてゐるとは、一人として想像してゐるものもあるまい。

金華山沖を飛ぶツェ伯號

谷中　上野公園の北方。
モーター　發動機。
廣小路　上野公園前の大通り。
松坂屋　百貨店。
ドラモンド、ヘイ　北米合衆國の婦人新聞記者。

グラフ、ツェッペリン號は今や關東八州を眼下に見て、東京に進みつゝある。四時十五分、谷中の方面から東京に入つた。先づ上野公園が見える。博物館の青や丹の屋根が目立つ。美術館が想像よりも大きく見える。西鄕の銅像の邊は非常な群衆だ。恐らく手を振りつゝ萬歲を叫んでゐるのでもあらうか。モーターの音に妨げられて聞くべくもないが、その熱狂の樣だけはうかゞはれる。廣小路に大きな建物が聳え立つてゐて、屋根は滿員客止といふ盛況だ。いはずと知れた松坂屋だ。

私はこの邊からホールを去つて航空室に入つて、ドラモンド、ヘイ女史と竝んで見おろす。女史はいふ、「いよ〳〵參りましたね。」と。

丸の内　宮城の東北に接する一郭。
品川・大森　東京市南部の兩區。
鶴見　今橫濱市に入る。
總持寺　曹洞宗大本山。もと石川縣(能登)にあつたが明治三十九年現地に移建した。

我々はやがて東京驛の上にさしかゝつた。驛前から宮城へかけての廣場は實に美しい。遙かに莊嚴なる宮城を拜した。宮城の青錆びた屋根は、丸の内一帶の洋式建築と一種の對照をなしてゐる。我が東京日日新聞社の屋上にも、同僚が澤山集つてゐる。あゝ我が友よ、故國を去つて三年、今この空中から兄等に對してなつかしさに堪へない。遙かに挨拶を送る。いつか飛行船は品川から大森へかけて飛んでゐる。鶴見の總持寺が見える。と思ふ間もなくもう橫濱だ。乘組員が「おい、獨逸の船がゐるぜ。」と同僚を呼ぶと、「どこだ。どこだ。」と伸び上つてゐる。

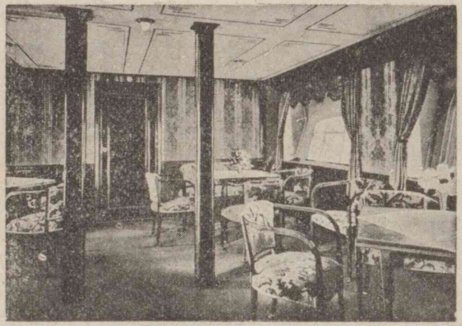
カウダ博士 ドイツのテンポ紙主筆。

五時過ぎ横濱に來たわがグラフ、ツェッペリン號は、再び東京へ同じ道を引返し、ひたすら霞ケ浦へと急ぐのであつた。もう六時である。夕陽の影は曇れる空にその姿をかくして、今はたゞ靜かに黄昏のけはひが野の末を包まうとしてゐる。もう霞ケ浦だ。格納庫の上に來た。六時三分だ。格納庫前の野原には無數の見物人が集つて、しきりに手を振つてゐる。

グラフ、ツェッペリン號は更に霞ケ浦を横ぎつて、一回轉して格納庫に向つた。カウダ博士は一所懸命でタイプライターを打つてゐる。着陸したらすぐ電報を打つために、その文案をたゝいてゐるのであらう。

ミッツェ 獨逸語。鍔のない帽子。

ドラモンド、ヘイ女史は輕快な洋服に着換へ、茶色のミッツェをかぶつてホールへ出て來た。「どうですか。」と聲をかけたら、「わたしは非常に幸福です。なぜつて、再び好きな日本を見るのですもの。」といつて微笑する。



ツェ伯號サロンの一部

もうずつと下降したと見えて、地上の聲が手に取るやうに聞える。六時十五分だ。風の吹く方向に轉換した飛行船は、しづ／＼と格納庫の上に來た。

航空室ではしきりに合圖の鈴が鳴つてゐる。二條の綱がする／＼と地上に投げ下される。白い作業

ゴンドラ　飛行船についてゐる吊船。
サロン　客間。

服の水兵達が、それを受取ると同時に、さつと二隊に分れて曳きはじめた。白蟻の如き水兵の二隊が二條の白蛇の如く伸びて行くと、それに從つて機體は徐々に地上へ下降して行つた。そして水兵達の手にゴンドラが受けとめられた頃は、あたりは夕闇が迫つてゐた。

サロンの窓から外を見ると、霞ケ浦の飛行場を取卷いてゐる群衆が堤の如く黒く遠くに見える。それを制してゐるらしい騎馬巡査の縦横に走つてゐるのが手に取るやうに見える。白服の海軍將校や水兵達が右往左往し、何やら聲高にいつてゐる。ゴンドラに手をかけてゐる水兵は、窓から顔を出してゐる我々を珍しげに仰ぐ。そしてお互に

ハースト社　北米合衆國の有名な新聞社。
フオン、ヴヰガンド　ハースト社の新聞記者。

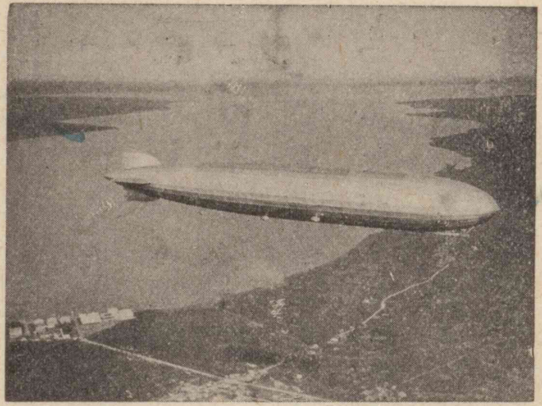
何か話し合つてゐる。

「實に眺望のよい美しい飛行場ですね。」

といふのは、ハースト社のフオン、ヴヰガンド君である。

「まあ、なんて勇ましい水兵さん達でせう。」

と感嘆するのは、ドラモンド、ヘイ女史である。


霞ケ浦上空のツェッペリン伯號

乘客の誰も彼も皆珍しさうに窓から顔を出し、いづれも嬉しさうである。

ガイゼンハイナア　ドイツの新聞記者。

サーチライト　探照燈。

カウダ博士・ガイゼンハイナア・イセリン等の諸君が、私の側にやつて來て、

「やあ、いよ〳〵着きましたね。どうです、嬉しいでせう。」

などと、口々に祝辭を述べてくれる。エッケナー博士も、

「このうちで一番幸福なのは圓地君さ。今日は圓地君は神様と一緒にゐるやうなものだよ。」

と、笑ひながら私の肩を叩いてくれる。

格納庫の入口とゴンドラを照らすサーチライトの光が夕闇を貫いてきらめく。水兵達は徐々にゴンドラを肩に前進を始めた。と、遠くの見物人の群から「萬歳」の聲と共に拍手の音が聞えて來た。私は窓から顔を出して、誰か知つた人でもゐないかと見まはしたが、遂にそれらしい人達の姿を見ることが出來なかつた。私は、たゞあちらからもこちらからも湧きあがる「萬歳」の喊聲に答へるために、絶間なく手を振つてゐるだけであつた。

グラフ・ツェッペリン號は遂に格納庫の中に收つた。

（空の驚異ツェッペリン）

福田正夫　神奈川縣の人。詩人。

二三　丘のほとり

福田正夫

秋風の丘のほとり
紫色の夕空さびしく光り
地は山々まで靄につゝまれ

坂を下る農夫のすがたが
靜かな影繪をゑがく

はだかの子供が一人
まだ鍬をふつてゐる
黒い土が崩れ　碎け　散る
その背景に海が
森の上を越え
廣く〳〵遠くひろがる
秋風はその海の上をも

渡つて來るであらうか
海は黒く光り
青く疲れた水の色が
空の暗さと映り合ふ

鮮かな山の端の黄金なす光
それらがうすぼやけて來ると
子供は「おゝい」と隣の畑に呼びかける
見えなかつたその父が
ひよくりと豆畑から立上り
「もうしまふべえよう」と

相馬御風　名は昌治。新潟縣の人。文學者。

のろ〳〵と歩みを移して來る
空も暗くなつた
風も寂しくなつた
私も晝中の一人のごとく
うすぐらい丘の路を
物思ひつゝ下り行く

二三　初秋の窓から

相馬御風

わが待ちし秋は來ぬらしこの夕草むらごとに
蟲の聲する

良寛和尚　俗名山本榮藏。新潟縣（越後）出雲崎の人。禪僧。詩歌を善くした。天保二年（二四九一）寂、年七十四。

これは良寛和尚の歌である。一見平凡のやうで、しかもしみ〴〵と胸にしみ入る力を持つた歌である。「このゆふべ」といふ第三句がよく利いてゐる。ふと蟲の音に心をとめた刹那の心の動きが「このゆふべ」の一句でぴたりと捉へられてゐる。今までぼんやりして氣づかずにゐたが、今晩ふと心をとめて聽くと、どこの草叢からも蟲の聲がきこえる。その蟲の音を聽くと、いよ〳〵自分の待つてゐた秋が來たらしく感ぜられる。——一首の大意はそれほどのところであらうが、それだけのさらりとした表現のうちに、秋を待ち得た歡びも、更に、自然の推移に對する驚きといつたやうな心持さへも感じられる。

この歌に比べると、かの有名

秋來ぬと　藤原敏行の歌。(古今集)

な

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ
おどろかれぬる

といふ古歌の現はし方などは、說明に墮してゐて實感味に乏しい嫌ひがある。「おどろかれぬる」などとことわつてゐるところに、却つて「おどろき」が捉り逃されてゐる。

だが、そのやうなことはさて措き、以上の二首とも音によつて初めて「秋」を感じてゐる點で相通じてゐるのは面白い。「秋は蟲の聲より」――かう一人は感じた。「秋は風の音より」――かう他の一人は感じた。そこが一種の興味をそゝる。

これらの名歌と比べようといふのではないが、私は嘗てこんな歌を詠んだことがある。

わが吹きし煙草の煙の行末を今朝しみ〴〵と
眺めたりけり

毎朝起きたての茶の間の爐傍に安座して、心靜かに一二本の煙草をくゆらすことが、この數年來の私の大きな樂しみの一つである。その朝も私はいつもの通りに、それをやつた。ところが、どういふはづみであつたか、その朝に限つて私の視線が不思議に窓から見える空へと引きよせられた。何といふ澄みきつた空の色だ。何といふそれはさやけさだ。そしてそのさやかに澄みきつた大空へと、靜かに亂れずに立ち昇つて行く細い煙の姿。しかもそれは私の

口が吸つては吐き、吸つては吐きしてゐる煙ではないか。あくまで靜かに、あくまでもゆるやかに、その紫がかつた白い煙は、深く澄んだ空へと高く〳〵昇つて行く。そのかぼそい、末は消えてしまふべき運命を持つた一條の煙――私の眼は、私の心は、いつとなしにしみ〴〵とその煙の行末にと引きつけられてゐたのであつた。

その大空の色と、その煙の姿！ 私はそこに初めてしみじみと「秋」を感じた。「秋」は大空より「秋」は煙の姿より――その朝、私は更にそんなことまで感じたのであつた。

しかし、季節の推移は、必ずしも何々から感じられると限つてはゐない。それは時に全く思ひがけないさゝやかな

現象や些細な事柄から感じられることがある。それは年年にちがふ。それは人によつてちがふ。いかに細かな、いかに深い注意を以て觀察してゐる人にでも、季節の推移の眞に感ぜられるのは、恐らくいつでも「ふとして」であらうと思はれる。

季節の推移は年々歳々同じやうに繰返されてゐるのであるが、しかし年々歳々にそれは新しく感じられる。「あゝ、もう秋だ。」といつたやうな驚きも、年々に新たである。自然は常に新たである。自分の庭にある木や草でさへも、見るたびに新たな氣持がする。人間の造つたものは、如何に美しくても、いつかは飽きずにゐられないが、自然の風物は常

エマースン　米國の思想家。(西暦一八〇三—一八八二)

北原白秋　福岡縣の人。名は隆吉。詩人。

に新たである。

人間の造つたものでも、自然が與へるやうな、見る度に接する度に、新たな感じを與へるものほど貴い。また、何物に對しても、自然に對する時のやうに、常に新たな感じを持ち得る人は貴い。それは幼兒の心だ。生そのものに對して、常に新たな心を持ち得るものは幼兒である。「成人の後までも幼兒の心を失はないものが眞の詩人だ。」と云つたエマースンの言葉も貴い。(野を歩む者)

二四　童心

北原白秋

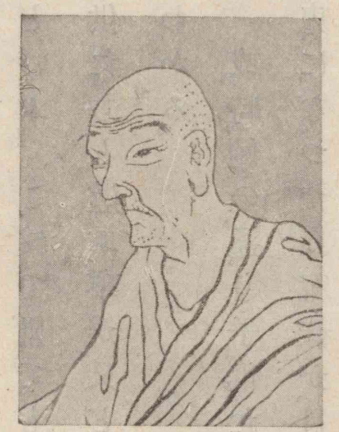
聖心は童の心である。

越後の良寛禪師は、殊にこの童心の持主であつた。かういふお話がある。

一に童男・童女、二に手毬、三におはじき、これが禪師の三好といふ。これで見ても、良寛樣がどんなに子供が好きで、子供たちと遊ぶ事が、又どんなに嬉しかつたかといふことがわかる。

或時、例の通り子供たちと、かくれんぼをしてゐられた。鬼になつた良寛樣が、目を瞑つて「もういゝよ。」といふかはいい聲を一心に待受けてゐられる。丁度日のくれどきで、子供心の何がな欲しくなる時である。家々の燈がちらちら點き出すと、子供たちは急に遊びをやめて、一人のこらず

こそ〳〵と歸つてしまつた。そこは子供だから、良寬樣も何もうつちやらかしてある。無論、いくら待つても「もういいよ。」といふものはない。そのうちに日が暮れ、長い夜が來た。さうしてとう〳〵夜が明けてしまつた。良寬樣は、それでも一所懸命だ。心から目を瞑つて、やはり同じ處に同じ姿したまゝ、「もういゝよ。」と子供が呼ぶのを待つてゐられた。



良寬

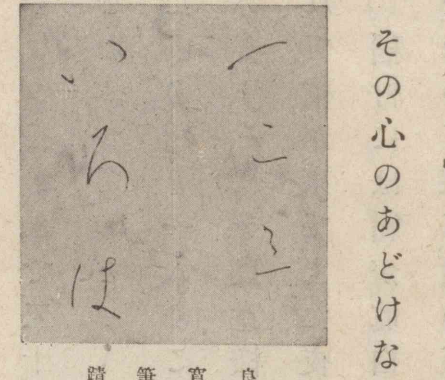
その心の素直さ、さうしてその誠の篤さ、正直さ。

それから、また或時のことである。良寬樣が、今度はかくれる事になつた。そこで、見つけられては大變だといふので、早速田圃の稻むらの中にもぐり込んで、それは〳〵小さくなつて、まるで二十日鼠見たいに、頭からすつぽりと稻藁をかぶつて、おど〳〵してゐられた。すると子供たちは、また例の通り一人のこらずこそ〳〵と歸つてしまつたのである。それを良寬樣は少しも御存知がない。また日が暮れて夜が來て、また夜が明けた。

稻村には霜が眞白に置き、朝の日がのぼり始めると、百姓がやつて來て、何の氣もなく稻たばを、やにはにはづすと、「おやつ」と驚いた。良寬樣が小さくなつてもぐつてゐる。「お

や、良寛様が。」と云ふと、慌てゝ「そつとしろ、そつとしろ、子供が見つける。」

その心のあどけなさ、ありがたさ、まるで子供である。



良寛筆蹟

また或日のことである。その良寛様が男の兒や女の兒達とお彈きをしてゐられた。沙門良寛全傳に「禪師頗る大勝を博して賭物の熬豆を多く得。」と書いてあるから、餘程の乘氣であつたらしい。丁度其の時、誰れかがはひつて來た。そして「おや〱、良寛様、なか〱あなた様はお彈きがお上手で。」と褒めると、罪が

ないこと、良寛様はぼうつと面を赤くすると、さも〱恥かしさうに、そつとその熬豆を膝の下に押隱したといふ。その心の初々しさ。そのきまりのわるさ、恥かしさは、全く佛の前に子供らしく、おとなしく、身をへりくだる心である。尊い聖心は凡てこの童心を源にする。

禪師が如何に天眞爛漫であつたかといふことを、もう一つお話する。

或時、赤々と實が熟れて鈴なりになつた柿の木の下で、小さな子供が一人泣いてゐた。良寛様が通りかゝつて「どうしたんだ。」と圓い頭をさすつてやると「あの柿が食べたい。」と

五合庵（挿圖）新潟縣西蒲原郡國上山にある。良寛が四十八歳より六十一歳まで住んだ處。

いふ。「よし〳〵、それではわしが取つてあげる、泣くんでないぞ。」と云ひながら、やつとこさと木の上に匍ひ上つた。枝につかまつて、あれかこれかと探してゐるうちに、それは全くうまさうな柿の實だ、一つ取つて口をつけると、それがおいしいのなんの、良寛様は夢中になつて嚙るは〳〵、まるで猿蟹合戰の赤いお猿のやうに、むしや〳〵と食べ惚れてゐる。

五合庵

下にゐる子供こそ哀れである。それを見て火のやうに泣き叫ぶと、始めて良寛様氣がついた。さあ、しまつた、これは、といふので、慌てて枝を搖つたといふ話。

思うてもその慌て方のをかしさ、罪のなさ、眞正直さ。その子供らしさ。全く涙がこぼれるほど嬉しいではないか。

禪師の玉のやうな此の童心は、榮藏と云つた童の昔その儘である。それは何物にも代へ難い、二つとない尊い天稟である。

まだ榮坊が八歳か九歳の頃だつたといふ。ある日父親からひどく叩かれたので、つい上目をした。そこでまた叩かれた。「親を睨むやうな奴は鰈になるぞ。」これを聞いた良寛様の榮坊は、外へ出て行つたが日が暮れても歸つて來ない。さあ、家内中大心配で、あちらこちらと捜し索めると、

或濱邊の岩の上に、悄然と佇んで沖の方ばかり眺めて居た。「榮坊、どうした。」と云ふと、榮坊「おれは、まだ鰈にならないか。」鰈になると云はれたので、ほんとに鰈になると思つて、一心に海を見つめてふるへて居た童心の正直さ。これをこそ生一本といふのであらう。童を欺く大人こそ禍である。聖心はこの童心を源とする。

（洗心雑話）

○　良寛

霞たつながき春日を子供らと手鞠つきつゝ今日もくらしつ

のみしらみ音に鳴く秋の蟲ならばわがふところは武藏野のはら

世の中にまじらぬとにはあらねどもひとり遊びぞわれはまされる

鶴見祐輔　群馬縣の人。思想家。

二五　障子

鶴見祐輔

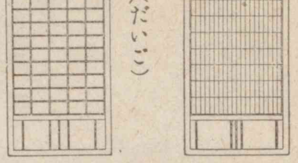
日本の障子といふものについて、誰か面白い研究を發表してもらへまいか、と私は始終考へてゐる。日本へ歸つて來て、うれしいものの一つは障子である。家のうちに坐つて、白い障子の紙を通して來る光線ぐらゐ心持のよいものは少い。

晴れた日によく、雨の日によく、燈火をつけて後の夜は更によい。

私は自分の書齋が、どうも氣が落着かないので困つてゐた。しかしどういふ譯とも知らずに五年ほど過した。つい近頃障子が無いからだと氣がついた。三方の一方だけが障子で、他の二方を磨硝子にしてあつた爲、机に落ちて來る光線に落着がなくて、さてこそ氣が落着かなかつたのだ。その二方の磨硝子のところへ障子をたてて見たら、すつかり部屋に落着が出來て、いくら書きものをしても草臥れなくなつた。矢張吾々の先祖はこの風土と吾々の性情に適するやうな工夫を、住居の上にも凝らしてくれてゐたのだ。

さうして私のやうな素人には解らないが、障子にはえらい種類があるもののやうだ。その部屋の工合と、仕事の種

障子の組方
（たてしげ）



（だいご）

類で、障子の種類も變へるのがいゝであらう。縦に棧の細かい「たてしげ」や、醍醐障子といふ棧の太い素朴なのや、その好みによつて用ふるところを異にすべきであらうと思ふ。

日本の風景を美しくするものは、矢張この障子である。久方ぶりで日本に歸つて來て、灯ともし頃民家につくあかりを車窓より見渡す氣持といふものはない。四邊の風景が、白い紙に赤々とうつる燈火の色で軟いでくる。人影の障子にうつる様子などは、日本でなくては見られぬ情緒である。

その代り、冬時の寒さを凌ぐ装置としては、これは叉驚くほど不完全なものである。あるフランスの婦人が、はじめ

て日本家に冬住んで「日本婦人は驚くべき人間だ。一枚の紙をもつて全宇宙と戰ふ。」といつたといふが、面白い觀方であると思ふ。

西洋人、殊にアメリカ人が日本へ來て羨ましがるのは、日本建築の白木造である。木を自然のまゝに出して使つてゐるのが、たまらなく氣に入るらしい。それは日本人に次いでは、木造の家を好むのはアメリカ人であるからだ。あるアメリカ人は、私の家へ來て、木の柱を幾度も撫でながら、「いゝなあ〱。」と子供のやうに羨ましがつた。

私は今日の日本が、美しい日本趣味を次第に失ひつゝあることを悲しむ。しかしそれも風雅な日本趣味の代りに、

純粹な西洋藝術が入るのなら、なほ慰むるところもあるが、アメリカ新開地に見るやうな、安い俗惡な文化住宅であるのは、日本の近代化のあまりに高價であることを思ふ。

（中道を歩む心）

二六　四季小品

德富蘆花

初春の山

後山に登る。

春空靄然として四山霞たなびき、爭はれぬ春となりぬ。海はゆら〱として空と一つに融け練れるが如き水の面に、富士の白雪ちら〱流れぬ。漁舟鷗よりも小なり。

德富蘆花　名は健次郎。熊本縣の人。文學者。昭和二年歿、年六十。

村々はまだ冬枯のまゝなれど、霞低う地に這ひ、春四方に滿てり。鳶一羽悠々として山下に舞ふ。

山崖、畑の畔、到るところ蕗の薹青く萠え、榛の木などは既に毿々の花をつけ、春蘭も早きは花咲きぬ。枯草枯葉の間より春は簇々として萠えつゝあり。

花月の夜

戸をあくれば十六日の月、櫻の梢にあり。空色淡くして碧かすみ、白雲團々、月に近きは銀の如く光り、遠きは綿の如く和(やはら)かなり。しづかに庭上を歩す。

春星影よりも微かに空に綴る。微茫たる月色、花に映じて密なる枝は月を鎖してほの暗く、疎なる枝は月にさし出

神武寺　神奈川縣三浦郡逗子町にある。天台宗。

でてほの白く、風情言ひ盡し難し。薄き影と、薄き光と落花點々たる庭に落ち、われは宛ら天を歩むの感あり。

蒼々茫々の夕

靜かなるは、麥刈濟む頃の田舍の夕暮なりけり。神武寺に遊び、夕に及びて、ひとり田間の道を辿りて歸る。日は蒼然たる暮雲に包まれて落ち、雲のきれ目に一抹朱をぼかせし殘照も消えぬ。こゝそこの畑より、村より、山側より、麥藁燒く煙縷々として立ち上り、蓬々として廣がり、はては山も村も茫々となりぬ。

暫らく立ちて眺むれば、暮雲・暮山の影落ちて、水暗き田の面に白きもの湧き出で、見る〳〵田より田に蔓(はびこ)りゆく。麥

藁燒く煙の影の田を渡るなりけり。その底に蛙聲あり。日落ち、煙滿ち、物は物と互に融け、恍として無我の境に入る。人語なく、物音なく、燈影なし。たゞ蒼々たり、茫々たり。

夏

梅雨霽れて、まさしく夏となりぬ。

障子を開き、簾をおろして坐すれば、簾外山青く、白衣の人往來す。富士も夏衣を著けぬ。綠の衣すが〱しく、頭には僅かに二三條の雪を冠れり。青疊敷く相摸灘の上を習習として渡り來る風の涼しきを聞かずや。

秋分

今日は秋分なり。

藤澤　神奈川縣高座郡藤澤町。有名なる遊行寺がある。

朝起きて外に出づれば、白露地に滿つ。稻穗・粟穗・尾花・蘆花、すべて露の中にあり。蟲聲水の如く流る。

彼岸の中日とて、近在の老幼男女、藤澤に鎌倉に寺詣りして歸るもの織るが如し。川邊には鯊を釣る者多く並べり。

午後の日悠々として碧潮川に滿ち、行人路に滿ち、日光空に滿ち、百舌鳥の聲耳に滿ち、風なく氣淸うして、秋、心に滿つ。

暮秋

柿の落葉を踏みて、後山に登る。

黃茅蕭々として亂れ、龍膽の碧と蓼花の紅と徑を綴る。

山上より見れば、田は盡く刈られ、麥の綠猶ほのかにして、村も瘠せ、晩秋の野いたく寂びぬ。

鴉五六羽あり、山上の樹より飛び、鳴きつれて彼方の村に向ふ。啞々の聲滿山にひびく。

寒樹

粉雪ちら〳〵として、やがて止みて日出でたれども、底寒きこと甚しく、北風終日膚を刺す。

日落ちて天紫なり。葉落ちつくしたる欅の大樹、幹は老將の如くに硬く、節高なる梢頭より針の如く絲の如き千萬枝、縱横にさし出で、紫の空を揶揄す。枝々骨を刺して寒きを覺ゆ。上には蒼ざめたる月あり。空に凍りつきたるやうなり。

雪の日

起き出で見れば、滿天滿地の雪。

玉屑紛々、亂れて斜に飛び、後山も之が爲におぼろなり。

風大いに到れば、積りし雪また亂れ立つて走る。

午後は愈、降りしきりて、馬車も通はずなりぬ。積る雪の重みに、何の木にや、ぼきりと折るゝ音するもの兩三度。

天地たゞ一白の中、ひとり前川のみ鼠色にして、鷗十數羽來りて泳げるあり。時々その二三羽、水を起つて、十分に翼をひろげ、風雪に向ひて飛ばんとすれど、吹きやられ吹きやられて、空しく水に下りぬ。

盡日霏々濛々、天地雪に埋もれ、人、風雪に閉ぢられ、斯くて降りながら夜に入りぬ。

安井息軒　名は衡、通稱仲平、息軒と號した。德川末期の大儒。明治元年(二五三六)歿、年七十八。

森鷗外　名は林太郎、島根縣の人。醫學博士、文學博士。大正十一年歿、年六十一。

仲平の父　安井滄洲。名は朝完。

夜十時、燈を執りて外を覗へば、飛雪猶紛々たり。(自然と人生)

二七　安井息軒

森　鷗　外

「仲平さんはえらくなりなさるだらう。」といふ評判と同時に、「仲平さんは醜男(ぶをとこ)だ。」といふかげぐちが清武一郷に傳へられて居る。

仲平の父は、日向國宮崎郡清武村に二段八畝の宅地があつてそこに三棟の家を建てて住んでゐる。財産としては、宅地を少し離れた處に田畑を持つてゐて、年來、家で漢學を人の子弟に教へるかたはら、耕作をやめずにゐたのである。

併し仲平の父は三十八の時江戸へ修行に出て、中一年おい

飫肥藩　伊東氏。五萬七千石。日向國(今宮崎縣)南那珂郡飫肥はその城下。

て、四十のとき歸國してから、段々飫肥(おび)藩で任用せられるやうになつたので、今では田畑の大部分を小作人に作らせることにしてゐる。

森　鷗　外

仲平は二男である。兄文治が九つ、自分が六つの時、父は兄弟を殘して江戸へ立つたのである。父が江戸から歸つた後、兄弟の脊丈が伸びてからは、二人とも毎朝書物を懷中して畑打に出た。そして外の人が煙草休をする間、二人は讀書に耽つた。

父が始めて藩の教授にせられた頃の事である。十七八

の文治と十四五の仲平とが例の畑打に通ふと、道で行逢ふ人がみな言ひ合せたやうに二人を見較べて、連があれば、連に何事をかさゝやいた。背の高い、色の白い、目鼻立の立派な兄文治と、背の低い、色の黒い、片目の弟仲平とが、いかにも不釣合な一對に見えたからである。兄弟同時にした疱瘡が、兄は輕く弟は重く、弟は大痘痕(あばた)になつて、剩へ右の目が潰れた。父も小さい時、疱瘡をして片目になつてゐるのに、又仲平が同じ不具になつたのを思へば、「偶然」といふものも殘酷なものだと云ふ外ない。

仲平は兄と一しよに歩くのを辛く思つた。そこで朝は少し早目に食事を濟ませて、一足先に出、晩は少し居殘つて

仕事をして、一足遲れて歸つて見た。併し行逢ふ人が自分の方を見て連とさゝやくことは止まなかつた。そればかりではない、兄と一しよに歩く時よりも、行逢ふ人の態度は餘程無遠慮になつて、さゝやく聲も常より高く、中には聲を掛けるものさへある。

「見い。けふは猿がひとりでゆくぜ。」

「猿が本を讀むから妙だ。」

「なに、猿の方が猿引よりはよく讀むさうな。」

「お猿さん。けふは猿引はどうしましたな。」

交通の狹い土地で、行逢ふ人は大抵識り合つた中であつた。仲平は一人で歩いて見て、二つの發見をした。一つは、

自分がこれまで兄の庇護の下に立つてゐながら、それを悟らなかつたといふ事である。今一つは、驚くべし、兄と自分とに渾名が附いてゐて、醜い自分が猿と云はれると同時に、兄までが猿引と云はれてゐるといふ事である。仲平はこの發明を胸に藏めて、誰にも話さなかつたが、その後は強ひて兄と離れ離れに田畑へ往返しようとはしなかつ

安井息軒と清武村の舊宅

篠崎小竹　名は弼。大阪の人、江戸時代末期の儒者。嘉永四年(二五一一)歿、年七十一。

た。

仲平に先だつて、體の弱い兄の文治は死んだ。仲平が大阪へ修行に出て、篠崎小竹の塾に通つてゐた時に死んだのである。

仲平は二十一の春、金子十兩を父の手から受取つて清武村を立つた。そして大阪土佐堀三丁目の藏屋敷に着いて、長屋の一間を借りて自炊をしてゐた。儉約の爲に、大豆を鹽と醬油とで煮て置いて、それを飯の菜にしたのを、藏屋敷では「仲平豆」と名づけた。中一年置いて、二十三になつた時、故郷の兄文治が死んだ。學殖は弟に劣つてゐても、才氣の鋭い若者であつたのに、とかく病氣で、とう〳〵二十六歲で

古賀侗庵　名は煜。肥前の人。幕府の儒官。弘化四年(二五〇七)歿、年六十。

昌平黌　德川幕府直轄の漢學專門の學校。寛永七年に創始され明治以後廢せられた。

松崎慊堂　名は復。肥後の人。掛川藩の儒者。弘化元年(二五〇四)歿、年七十四。

林　世々幕府の學政を掌つた家。

死んだのである。仲平は訃音を得て、すぐに大阪を立つて歸つた。

その後仲平は二十六で、江戸に出て、古賀侗庵の門下に籍を置いて昌平黌に入つた。後世の註疏に據らずに經義を究めようとする仲平のためには、古賀より松崎慊堂の方が懷かしかつたが、昌平黌に入るには、林か古賀かの門に入らなくてはならなかつたのである。痘痕があつて、片目で、背の低い田舍書生は、こゝでも同窓に馬鹿にせられずには濟まなかつた。それでも仲平は無頓着に默り込んで、獨り讀書に耽つてゐた。座右の柱に、半折に何やら書いて貼つてあるのを、からかひに來た友達が讀んで見ると、

忍が岡　今の上野公園の地。昌平校は最初この地にあり、後に湯島に遷した。

今は音を忍が岡のほととぎす
　　いつか雲井のよそに名のらん

聖堂の講釋

と書いてあつた。「や、えらい抱負ぢやぞ。」と友達は笑つて去つたが、腹の中ではやゝ氣味惡くも思つた。これは十九の時、漢學に全力を傾注するまで、國文をも少しばかり研究した名殘で、わざと流儀ちがひの和歌の眞似をして、同窓の揶揄に酬いたのである。

仲平はまだ江戸にゐるうちに、二十八で、藩主の侍讀にせ

られた。そして翌年藩主が歸國せられる時、供をして歸つた。その年の正月から清武村字中野に藩の學問所が立つことになつて、工事の最中である。それが落成すると、六十一になる父滄洲翁と、去年江戸から藩主の供をして歸つた二十九になる仲平さんとが、父子共に講壇に立つ筈である。江戸がへり昌平黌じこみと聞いて、「仲平さんは偉くなりなさるだらう。」と評判する郷里の人達も、痘痕があつて、片目で、背の低い男振を見ては、「仲平さんは醜男だ。」とかげごとを言はずにはおかなかつた。

大儒息軒先生として、その名を知られるやうになつたの

永田秀次郎　貴族院議員。兵庫縣の人。俳句をよくし、青嵐と號する。

永井尚政　淀の城主。元和八年老中に列し、書院番頭を兼ねた。寛文八年歿。

井伊直孝　彦根の城主。萬治二年歿、年七十。

は、仲平が四十八の頃からである。（鷗外全集）

二八　立身に妙法なし

永田秀次郎

圍碁の格言に「名人に妙手無し。」といふ事がある。即ち名人は常に正々堂々一手をも忽諸にしないから、自然の大勢で平々凡々に敵に勝つ。故に妙手を出して奇功を奏する必要がないのである。

嘗て德川時代に永井信濃守尚政が老中となつた時、井伊直孝に教を請うた。直孝は容易に教へない。遂に齋戒沐浴七日間の後、烏帽子・直垂の大禮服を着用して、謹んで再び教を請うた時に、直孝は端然として之に告げて「たゞ油斷大

アレキサンダー・デューマ　フランスの文學者。一八七〇年歿。年六十八。

敵の四字を忘るな。」と言つた。尙政は深く感謝して退出したといふ。私はこの物語を聞いた時に、なるほど眞理は平凡なものであるなと思つた。

眞理は常にかくの如く平凡である。故に若し世の青年が眞に立身に妙法なしといふ一事を心肝に銘じて奮起するならば、この一事既に諸君を成功に導くに足るのである。先づその依賴心を去れ。決して妙法を求むるな。而してたゞ平凡なる眞理の道を步め。平凡なる眞理の道とは何であるか。たゞ努力である。我の眞に恃む所はたゞ我あるのみである。

アレキサンダー・デューマ曰く「我を救ふ者何處に在りや。

曰く爾の側に在り、卽ち爾自身なり。之を知らずして他に求むれば、之より難きはなし。之を知りて自ら求むれば、之より易きはなし。」と。眞に自己を救ふ者はたゞ自己あるのみ。この一事を如何なる程度に理解するかは、やがてその人が如何なる程度まで成功するかといふことである。

若し茲に人あつて、自分の頭上に帽子を被つてゐることを忘れて、頻りに部屋や押入を捜し廻つてゐるとすれば、天下これほど滑稽な事はあるまい。併しながら、今日の青年に、眞に神樣の前に立つてこの男を笑ひ得る者が幾人あるであらうか。徒らに他人に依賴し、自ら努力せずして、僥倖のみを冀ひ、賢き平凡の正道を步まずして、愚なる巧妙の間道

天は云々　蘭人スマイルの言

禍福云々　左傳にある語。

心だに云々　作者不明。一説に菅原道眞の歌といふ。

を走らんとする者は、總て自己頭上の帽子を忘れて、之を部屋や押入に捜してゐる男と同一である。

「天は自ら助くる者を助く。」「禍福門なし、唯これ人の招く所。」聖書に曰く「我を呼びて主よ主よといふ者、盡く天國に入るにあらず。たゞ之に入る者は天に在す我が父の旨に遵ふ者のみなり。」と。禮拜ばかりでは天國に行けない。神樣の旨に遵ふ言行が無くてはならぬ。

　心だに誠の道にかなひなば
　　祈らずとても神や守らむ

と云ふのも同じ教である。自ら努力せずしては、神樣にも救うて貰へない。況やこの世智辛い世の中に立つて、自己

カーネギー　アメリカの富豪。一九一九年歿、年八十四。

の運命を開拓せんと欲する者が、如何にして他人のみに依賴して成功する事が出來ようか。

　或人が米國の富豪カーネギーに致富の妙法を訊いた。カーネギーは之に答へて「富豪となるに最も必要なる條件は、貧家に生まれる事である。貧乏のどん底に生まれて貧乏の苦痛を骨髓に徹するほど味はつた者が、腹のどん底から奮起してこそ、始めて富者となり得るのである。生まれながらにして銀の匙を口に入れたやうな者が、どうして眞の富豪になれようか。」と言つた。誠にその通り、不撓不屈、堅忍努力の眞の覺悟は、艱難に遭遇して始めて得らるゝものであらう。　王侯の家に生まれた釋迦も、山中に入つて難行

苦行の修養を積んで、始めて大悟したのである。

嗚呼立身に妙法なし、眞理は平凡なり。汝を救ふ者はただ汝あるのみ。自己頭上の帽子を忘れて、之を他に搜す者は誰ぞ。（梅白し）

柳澤淇園　大和（奈良縣）郡山藩の重臣。名は里恭。修して柳里恭といふ。多才、殊に繪畫に秀でてゐた。寶暦八年（二四一八）歿、年五十三。

二九　修養三題

柳澤淇園

一

淀川にて鯉を取るに、漁夫水中に入りて鯉と竝び居て、脇へかいこみて浮み出づるを抱鯉と云ふ。近き頃よりの事なりとぞ。人を諫むるの道もこれに同じ。始は他人の悪しきことと共に竝びゐて、折よきところにて、善におもむかしめんとすること肝要たるべし。

人を意見するも、大かたの人はその者の非なることを擧げて意見す。いよ／＼容れざるなり。まづその人の功を擧げてこれを賞美し、「かゝる功をなしながら、いかでかさるよろしからざることにおもむくや。よろづ任すべき人がらなるを、たゞよろしからざるの志よりして、今までの大功を失へり。その善に歸すべし。」とあらば、人必ずその理に伏すべし。

二

江戸にて予が親しく交はりし友に、何某といふ人あり。書を好みて食事の傍にも見臺をすゑて、書籍をひらき置き

五常 仁義禮智信。

て見居けり。其の行篤實にして、常に机上に書をひらけども、決して疊の上におかず、一冊たりとも本箱の出し入れを愼みて、これを戴きて取扱ふこと、丁寧誠に至れりといふべし。

ある書林の、店に書籍を竝べおきて、その上を跨ぎ或は踏み越えなどするを見て、「かの書林は出世なり難し。」といへり。又他の書商の、客來りて求むる時は、その書をいたゞきては出し、いたゞきては取入るゝを見て、「やがて上もなき書肆となるべし。」とて悦びけり。

此の人の詞に、「悟るといへば僧・法師などの道ばかりのやうに心得たるものあれども、常の人にても五常をよく悟り

得ざれば、身にも行ひ、人にも教訓せらるゝものにあらず。世に悟る者は稀にして、只知りたる人のみ多し。」といへり。實に確言といふべし。

三

或人文盲なる者に意見して、「世の交は他の事はいらず、唯堪忍の二字をよく守るべし。」と言ふ。文盲の人首を傾け「『かんにん』とは四字にてはべらずや。」と指にて數へ「御許には思しちがひなるべし。『かんにん』と四字にてはべり。」と言ふ。意見せる人、「愚昧の人かな。『堪忍』とは『たへしのぶ』と書きて二字なり。」と言へばまた首を傾け『たへしのぶ』ならばまた一字ふえたり。五字となりぬべし。何と仰ありとも、我等は

芳賀矢一　國文學者。文學博士。福井市の人。昭和二年歿、年六十一。

林廣守　宮內省雅樂部副長。大阪市の人。明治二十九年歿、年六十六。

四字と思ひはべれば、四字にてかんにんは致しはべるなり。」と言ふ。かの意見せる人また言ふ「汝が如き愚昧の文盲は實にさとしがたし。人に似て蟲同様なり。おのれが氣ままにすべし。」と大いに憤りければ、文盲の人笑ひて「何とも仰あるべし。我等は『かんにん』の四字を知りはべれば、惡口せられても少しも腹立ちはべらざるなり。」とて、笑ひゐたりきとぞ。（雲萍雜志）

三〇 國歌と國旗

芳賀矢一

國歌「君が代」の作曲は、一度外國人が手を著けて不成功に終つたのを、宮內省雅樂部の林廣守翁が、全然古代の雅樂に則つて作つたもので、割合に新しいに係らず、非常に尊嚴なものである。

林廣守

この「君が代」の吹奏される時、我等の心には我が國體と歴史とを思つて、非常に懷かしい、さうして嬉しい情が湧立つのを覺える。その曲は誠に平和で、溫情に滿ちて居つて、何となく「義は君臣にして情は父子」といふ感を起させる。その歌の內容が、たゞ君が代を千代に八千代にと祝ふ所に、我が國體の表はれてゐるのが嬉しい。國歌は最もよくその國體を表はす。西洋諸國の國歌を見れば、同じく「皇帝に幸あ

れ。」と歌ふ歌にも、それを神に祈るのである。また帝王を祝する外に、或は國民を歌ひ、或は國土を歌ふ。民衆から成立つた王室、國土とは全く別である王室を戴く國民としては當然な事である。

「君これ神」なら、我が國に於ては、天皇の御長壽を更に神に祈る必要はない。「君これ國」なる我が國に於ては、君の祝福の外に別に國土の祝福を祈る必要はない。「君これ父」なる我が國に於ては、皇室の繁榮より外に、人民の幸福を願ふ必要はない。

大君の御代が長久であるといふうちに、人民の幸福も、國土の繁榮も含まれてゐる。單に天皇の御長壽を祝賀する

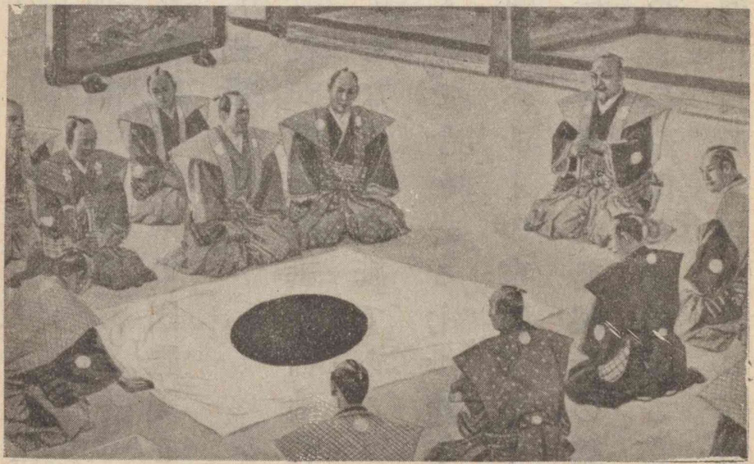
ペリー アメリカ合衆國の海軍提督（西暦一七九四―一八五八年）

徳川齊昭 水戸第九代の藩主。景山と號する。萬延元年(二五二〇)歿。年六十一。烈公と諡した。

のが、卽ち我が國家、我が臣民のあらゆる祈願を含んでゐる所に、日本の國體があるのである。三十一文字の短い歌、これが數千年來の國體美を表はし、九千萬人の赤誠を表はした國歌である。

我が國の國旗は白地に太陽を描いてゐる。卽ち言ふまでもなく日章旗である。この日章旗はもと船印から來たもので、今を去る七十餘年前の嘉永六年、アメリカ合衆國の使節ペリーの來朝するや、これに刺戟されて、幕府は多年厲行してゐた大船製造の禁を解いたので、外國船と紛れないやうに、船印を制定する必要が起つた。そこで翌年水戸の徳川齊昭の議を納れて、日の丸を以て船印を定めた。後萬

萬延元年
第百二十一代孝明天皇の御代、德川家茂の治世。
新見豐前守
安政六年外國奉行となり、翌萬延元年正月村垣淡路守・小栗豐後守等と共に米國軍艦に乘り米國に使した。
咸臨丸
勝安芳・木村圖書等が之に搭乘した。



德川齊昭日章旗制定を議す（齋藤五百枝筆）

延元年、外國奉行新見豐前守正興が、批准書交換の爲に合衆國へ使した時、同航した咸臨丸にこの船印を用ひて行つたが、かの國人はそれを見て、意匠の壯烈なのに驚歎したといふ事で、これが抑々日章旗の世界に輝くやうになつた初であるが、その單純な様式に於て、諸外國の國旗と異なつてゐる。すべてに於て簡單を喜び、清潔を愛する

國民の趣味には最もよく合してゐる。 さうして日本といふ意味をば最もよく表はしてゐる。

日本は東半球の最東部に國を成してゐるので、朝な〱さし昇る初日の光は、他の諸國に先だつて、第一に我が帝國を照すのである。 日本といふ國名も誠に現實である。 皇祖天照大神は卽ち日神であるといふのが、我が國祖先の信念であつた。 この歴史もまた國旗の上に表はれてゐる。

日の丸は日本國の象徴である。 さうしてまた日本人の赤心「明き淨き心」の象徴とも見られるのである。

君が代の國歌の歌はれる所、日の丸の國旗の翻る限り、我が皇室の稜威が輝き、我が國民の活動があるのである。

國語讀本卷一終

三次中學校第一學年第二學級

森岡勲

昭和十二年八月十九日印刷
昭和十二年八月廿三日發行
昭和十三年二月十七日訂正再版印刷
昭和十三年二月廿一日訂正再版發行

國語讀本 改訂新版
（各卷 定價金六十錢）

編者　上田萬年
同　榮田猛猪
同　鹽野新次郎

發行者兼印刷者　東京市麹町區丸ノ内三丁目六番地　株式會社 啓成社　右代表者 布津純一

印刷所　東京市牛込區早稻田鶴卷町一〇七　株式會社 康文社印刷所

發行所　株式會社 啓成社
東京市麹町區丸ノ内三丁目六番地
電話丸ノ内(23)二六八六番
振替東京一二〇五五番